

第1回

6/3 (金)

都市

と

美術

成均館大学  
×  
早稲田大学

フォーラム

場所： 早稲田大学文学学術院 戸山キャンパス  
33号館16階第10会議室 (入場自由)

研究発表(1) 日本語、韓国語通訳付き

|             |                                             |                                     |
|-------------|---------------------------------------------|-------------------------------------|
| 9:45-10:00  | 開会の挨拶                                       | 坂上桂子 (早稲田大学)<br>シンジュンジン 慎重進 (成均館大学) |
| 10:00-10:40 | ウォルウォル祭を通して見る「北亭町」の話<br>—都市から人へ届く芸術         | ベクスンファン<br>白承桓<br>(成均館大学・修士課程)      |
| 10:45-11:25 | ライオネル・ファイニンガーの摩天楼表象<br>—マンハッタン連作からグラフィック様式へ | 佐々木千恵<br>(早稲田大学・修士課程)               |
| 11:30-12:10 | 都市再生時代の「共感、共有と協力による芸術」<br>—聖水洞の話            | キムスンユン<br>金承潤<br>(成均館大学・修士課程)       |

研究発表(2) 日本語、韓国語通訳付き

|             |                                            |                                 |
|-------------|--------------------------------------------|---------------------------------|
| 13:15-13:55 | 都市の労働者としての踊り子<br>—エドガー・ドガの1870年代末における作風の変化 | 菅野美奈子<br>(早稲田大学・博士課程)           |
| 14:00-14:40 | 若い力と共に行う都市再生<br>—「弘大 歩きたい通り」と「京義線 森の道」の話   | キムヒョンジョン<br>金賢姪<br>(成均館大学・修士課程) |
| 14:45-15:25 | 世紀転換期のボナールの作品における街路と通行者<br>の変容             | 吉村真<br>(早稲田大学・博士課程)             |

研究発表(3) 英語

|             |                                                                                       |                                |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------|
| 15:50-16:10 | Ikseon, the Neighbor's Talk                                                           | ジョンウンジュ<br>全恩主<br>(成均館大学・博士課程) |
| 16:15-16:35 | Berenice Abbott's "Changing New York"<br>: People and Lives of the Heterogeneous City | 山田隆行<br>(早稲田大学・助手)             |

お問い合わせ先：複合文化論系助手 山田隆行 (t-yamada@aoni.waseda.jp)

제1회

6/3

# 도시와 미술

성균관대학교  
×  
와세다대학교

포럼

장소: 와세다대학교문학학술원 토야마캠퍼스  
33호관16층 제10회의실 (입장자유)

## 연구발표(1) 일본어,한국어통역

|                   |                                              |                                 |
|-------------------|----------------------------------------------|---------------------------------|
| 9 : 45 - 10 : 00  | 개회의 인사                                       | 사카가미 케이코(와세다대학교)<br>신중진(성균관대학교) |
| 10 : 00 - 10 : 40 | 월월축제를 통해 바라본 북정마을이야기<br>-예술은 도시를 넘어 사람에게 닿는다 | 백승환<br>(성균관대학교 · 석사과정)          |
| 10 : 45 - 11 : 25 | 라이오넬 파이닝거의 마천루 표상<br>-맨해튼 연작에서 그래픽양식으로       | 사사키 치에<br>(와세다대학교 · 석사과정)       |
| 11 : 30 - 12 : 10 | 도시재생 시대의 '공감, 공유와 협력에 의한 예술'<br>- 성수동 이야기    | 김승윤<br>(성균관대학교 · 석사과정)          |

## 연구발표(2) 일본어,한국어통역

|                   |                                                |                           |
|-------------------|------------------------------------------------|---------------------------|
| 13 : 15 - 13 : 55 | 도시의 노동자로서의 발레리나<br>에드가 드가의 1870년대말에 보이는 작품의 변화 | 칸노 미나코<br>(와세다대학교 · 박사과정) |
| 14 : 00 - 14 : 40 | 젊음과 함께하는 도시재생<br>-홍대 걷고 싶은 거리, 경의선 숲길 이야기      | 김현정<br>(성균관대학교 · 석사과정)    |
| 14 : 45 - 15 : 25 | 세기말 전환기의 보나르 작품에 보이는<br>거리와 통행인의 변용            | 요시무라 신<br>(와세다대학교 · 박사과정) |

## 연구발표(3) 영어

|                   |                                                                                       |                           |
|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|
| 15 : 50 - 16 : 10 | Ikseon, the Neighbor's Talk                                                           | 전은주<br>(성균관대학교 · 박사과정)    |
| 16 : 15 - 16 : 35 | Berenice Abbott's "Changing New York"<br>: People and Lives of the Heterogeneous City | 야마다 타카유키<br>(와세다대학교 · 조수) |

문의 및 연락처: 복합문화론계조수 야마다 타카유키(t-yamada@aoni.waseda.jp)





---

## ウォルウォル祭りを通して見る「北亭<sup>マウル</sup> 町」の話

### —都市から人へ届く芸術

ベクスンファン  
白承 桓（成均館大学・修士課程）

---

共同研究者：金承潤<sup>キムスンユン</sup>

#### 【01 プロローグ】‘イベント’を通して見た都市の‘日常’

第1回都市と美術フォーラム。その最初の話に‘逸脱を夢見る’ある<sup>マウル</sup> 町を紹介したいと思う。ソウル漢陽都城と接している城郭<sup>マウル</sup> 町 22ヶ所の内の一つであるこの<sup>マウル</sup> 町は昔から人々が賑わっていたことから、‘北亭<sup>マウル</sup> 町’<sup>マウル</sup>と名付けられた。

#### 【02 北亭<sup>マウル</sup> 町<sup>マウル</sup> の紹介】‘都市’の中にひそむ ‘田舎’、北亭<sup>マウル</sup> 町<sup>マウル</sup>

北亭<sup>マウル</sup> 町は本来朝鮮時代に御宮庁の北屯が設置されていた場所で、国が居住する人たちを集め、定住させたことから<sup>マウル</sup> 町になった。宮殿で使う味噌玉麴を作る権利をこの<sup>マウル</sup> 町に与え、味噌玉麴をつくる音で賑わっていた所でもある。開発が行われなかったおかげで北亭<sup>マウル</sup> 町の時計はいまだ1980年代で止まっている。道路や家はもちろん、そこで暮らす人々もまた1980年代の田舎の人心のままである。

#### 【03 ウォルウォル祭りを通して見る北亭<sup>マウル</sup> 町<sup>マウル</sup> の話】

ウォルウォル祭りは‘城郭(Wall)の上に映る月’を意味する。2009年から今まで7年間合計6回にかけて行われたウォルウォル祭りは、その行事自体重要であるが、その準備の過程とそこから立ち現れる人々の関係に焦点を当てる必要がある。

##### 【03-1 ウォルウォル祭り 第一話】住民に文化と誇りを

最初のウォルウォル祭りは2009年、国民大学公演芸術学部のイ・ヘギョン教授によって推進された。祭りのテーマは‘北亭城郭<sup>マウル</sup> 町の月光スケッチ’であった。彼女は北亭<sup>マウル</sup> 町に住む知人の家を訪れた際、過去の姿が残っているだけでなく、隣人同士の情にあふれるこの<sup>マウル</sup> 町を見て、逸早く祭りを提案した。城北区庁へ祭りの企画案を提出し、予算支援を受けながら本格的に祭りが開始された。大学と行政が軸となって共に準備したウォルウォル祭りは、その開催自体が大きな意味を持っていた。祭りを通して、住民が芸術と歴史、そしてデザインに触れられるように促すことで、住民に‘文化’の重要さを気づかせ、自分たちの<sup>マウル</sup> 町に対する誇りを持たせた。これに対して、住民は‘ウォルウォル祭り委員会’を組み、<sup>マウル</sup> 町の祭りを支援した。最初の祭りということで、プログラムは芸術家と学生たちを中心に構成された。

### 【03-2 ウォルウォール祭り 第二話】住民の役割の増大

北亭町<sup>マウル</sup>で二回目の祭り‘北亭城郭町<sup>マウル</sup> 星の光のメロディー’は企画序盤に様々な難関にぶつかった。何より難しかったのは、今回のテーマが芸術教育と祭りの連携だったのに対し、住民同士の葛藤によって互いに様子見の状態となり、誰も教育対象者に志願しなかった点である。住民の非協力的な態度に反して、昨年共に活動した芸術家たちは快く参加した。しかし何度も繰り返してコンタクトを取った結果、住民たちは町<sup>マウル</sup>を開き始め、やがて芸術家たちの献身的な努力と幾度もの交流を通して、住民たちは教育を楽しみながら祭りの日を待つようになった。祭りのプログラムには大きな変化はなかったが、写真展示や道遊びプログラムを住民が共に準備することによって彼らの役割と力量はますます高まっていった。

### 【03-3 ウォルウォール祭り 第三話】再開発の風と共に退色していくウォルウォール祭り

2011年は城北区長が新しく赴任し、彼の政治的、経済的変革(政治・経済的な変化の年と宣言)によってウォルウォール祭りもまた大胆な変化を模索しなければならなかった。予算が半分も減り、地域に住宅を所有する一部の住民たちは、長年試みた再開発が今度こそ行われるという期待から、祭りを快く思わなかった。歴史、空間、暮らしの美しさを称える町<sup>マウル</sup>の祭りは、町<sup>マウル</sup>をそのまま維持しようとする雰囲気を作る恐れがあるというのが、彼らの考えであった。それゆえ今回は北亭町<sup>マウル</sup>に最小限の行事を残したまま、祭りの本部を城北グローバルヴィレッジセンターへ移すなど、そのコンセプトを転換させた。また、祭りの場所を変更すると共に、名前も‘北亭城郭町<sup>マウル</sup> ウォルウォール祭り’から‘城北洞<sup>マウル</sup> 夕日のハーモニー(2011)’へ変更し、北亭町<sup>マウル</sup>を含む周辺の城北洞<sup>マウル</sup>一帯を包括する祭りとして企画した。北亭城郭町<sup>マウル</sup>演劇祭と尋牛荘<sup>シムウジャン</sup>での詩の朗読だけが北亭町<sup>マウル</sup>で開かれた。

### 【03-4 ウォルウォール祭り 第四話】危機を超え機会へ 住民が主催したウォルウォール祭り

2013年、城北真景フェスティバルが城北区内の文化芸術コンテンツを一堂に集めて行う統合型地域祭りとして位置づけられ、ウォルウォール祭りは城北真景フェスティバルに吸収されるか消滅するかのどちらかになるように見えた。しかし、2013年のウォルウォール祭りは城北真景のフェスティバルとは個別に開催された。年初から結成された祭り推進委員会はマウルの住民が直接参加し体験できる祭りを構成した。祭りの日程が決まると、住民たちは来場者を迎えるための環境改善を行った。5月から北亭町<sup>マウル</sup>の隅々を掃除し、路地の花壇を整え、北亭町<sup>マウル</sup>の入口に案内図を設置するなど、外部からの訪問に備えた。6月から9月までは本格的な祭りの準備に入り、住民が中心となって外部の支援を受けながら祭りを運営した。住民センター、城北文化財団、城北区まちづくり支援センターなど、各種職能団体から住民が援助を受けた。住民は直接プログラムを企画し、外部の協力を得て多彩な祭りを作り上げた。三回目のウォルウォール祭りは豆腐・味噌玉麴作り体験プログラム、昔なつかしい写真の展示、北亭老人ホームシルバードанススポーツクラブなど、北亭町<sup>マウル</sup>らしい祭りに成長した。これ以降も、住民が準備した食べ物は心から心に伝わり、町<sup>マウル</sup>の人々皆の努力が伝わったかのように、2014年、2015年と相変わらず数多くの人々が祭りに訪れている。

#### 【04 結論】都市から人へ届く芸術

北亭町<sup>マウル</sup>のウォルウォル祭りは、祭りが町<sup>マウル</sup>にとって非常に重要な意味を持つことを証明した。町<sup>マウル</sup>には数多くの住民たちと住民同士の関係性が存在する。また、町<sup>マウル</sup>と関わる多くの団体が外部から町<sup>マウル</sup>を支援するために集まる。したがって、祭りを通して町<sup>マウル</sup>の内部的関係と外部的関係を見ることによって、町<sup>マウル</sup>の日常を最も凝縮した形で見ることができる。ウォルウォル祭りは、北亭町<sup>マウル</sup>の住民ではなく国民大学の教授によって始められたものの、彼女の努力が町<sup>マウル</sup>の住民を目覚めさせる火種となった。彼女が北亭町<sup>マウル</sup>で祭りを準備する間、町<sup>マウル</sup>には数々の変化が起きた。芸術に誰も興味を示さなかった山奥の町<sup>マウル</sup>に、彼女たちの芸術が溶け込むことによって、かわいらしい諸空間を作り上げ、その結果元気を失っていた町<sup>マウル</sup>の顔に笑顔が表れ始めた。祭りを準備する過程に住民たちが参加するよう促し、町<sup>マウル</sup>に対する誇りを抱かせることによって、住民たち自身もこの場所を大切に思うようになった。さらに、住民だけでなく行政と外部の人々も参加し、多くの関心を引き寄せた。北亭町<sup>マウル</sup>はもう‘一人’ではなく、行政と外部の人々と‘共に’ある、‘皆’の町<sup>マウル</sup>として生まれ変わった。祭りを準備する過程で多くの困難があったが、「災い転じて福と成す」ような過程を経て、彼らの力はより一層強くなった。初期の祭りの主体は町<sup>マウル</sup>の住民ではなく、国民大学の教授とその学生たちであった。彼らが北亭町<sup>マウル</sup>で共に過ごす間、町<sup>マウル</sup>の環境を変えるだけでなく、再開発によって離れていく住民同士の関係を回復して心を通わせるようになるという、単純な環境改善を超えた効果を生んだ。さらに、国民大学が関わらなくなってからも、町<sup>マウル</sup>の人々が主体となって祭りを主催し、回数を重ねるたびに、そのスキルを強化していった。今現在、北亭町<sup>マウル</sup>の人々は彼らの町<sup>マウル</sup>を誇りに思っている。どんな試練が訪れても、彼らは一つになって解決していくであろう。このように芸術は都市を超越し、人へ届く。たとえ都市が変わるとしても、必ずしも人が変わるわけではない。しかし、人が変われば都市は必ず変わる。人を変える芸術。それが本当の芸術の役割ではないだろうか。

## 월월축제를 통해 바라본 북정마을이야기

부제 : 예술은 도시를 넘어 사람에게 닿는다.

백 승 환 (성균관대학교 · 석사과정)

---

공동연구자 : 김승윤

### [01 프롤로그] ‘이벤트’를 통해 바라본 도시의 ‘일상’

제 1 회 도시와 미술포럼. 그 첫번째 이야기로 ‘일탈’을 꿈꾸는 어느 마을을 소개하고자 한다. 서울 한양도성과 접해있는 성곽마을 22 곳 중 하나인 이 마을은 예로부터 사람들이 북적북적 거린다하여 이름 붙여진 ‘북정마을’이다.

### [02 북정마을 소개] ‘도시’ 속에 숨어있는 ‘시골’, 북정마을

북정마을은 본래 조선시대 어영청의 북둔이 설치되어 있던 곳으로 나라에서 거주할 사람들을 모집하여 정착시켰던 데에서 마을이 시작되었다. 궁에서 사용할 메주를 만들 권리를 이 마을에 주어 메주 쪼는 소리에 북적거리던 곳이기도 하다. 개발이 이루어지지 않은 덕분에 북정마을의 시계는 여전히 1980 년대에 멈춰있다. 도로와 집들은 물론이거니와 그곳에 사는 사람들 또한 1980 년대 시골마을의 인심 그대로다.

### [03 월월축제를 통해 바라본 북정마을이야기]

월월축제는 “성곽(wall)위에 비친 달(月)”을 의미한다. 2009 년을 시작으로 지금까지 7 년간 총 6 회에 걸쳐 진행된 월월축제는 그 행사 자체도 중요하지만 행사를 준비하는 과정과 행사를 통해 드러나는 그들의 관계에 초점을 맞출 필요가 있다.

#### [03-1 월월축제 그 첫번째 이야기] 축제를 통해 주민들에게 문화와 자부심을 심어주자!

최초의 월월축제는 2009 년 국민대학교 공연예술학부 이해경 교수에 의해서 추진되었다. 행사의 테마는 ‘북정성곽마을 달빛스케치’였다. 그녀는 북정마을에 사는 지인의 집을 방문했다가 과거의 모습이 남아있을 뿐 아니라 이웃 간에 정이 넘치는 마을의 모습을 보고 먼저 축제를 제안하게 되었다. 성북구청에 축제 기획안을 제출하고 예산지원을 받게 되면서 본격적으로 축제가 시작되었다. 학교와 행정의 주축이 되어 함께 준비한 월월축제는 그 시작만으로도 큰 의미를 가졌다. 이를 통해 예술과 역사, 그리고 디자인을 마을주민들이 경험해볼 수 있도록 함으로써 마을주민들에게 ‘문화’라는 것을 일깨워주고, 마을에 대한 자부심을 심어주는 역할을 하였다. 이에 마을주민들은 ‘월월축제위원회’라는 것을 조직하여 마을축제를 지원하였다. 초창기 축제라는 점에서 프로그램은 예술가와 학생들 위주로 구성되었다.



### **[03-2 월월축제 그 두번째 이야기] 주민의 역할이 점점 커져가는 월월축제 !**

북정마을 2 번째 축제인 ‘북정성곽마을 별빛멜로디’는 기획 초반에 여러 어려움을 맞이했다. 무엇보다 어려웠던 점은 이번 축제가 예술교육과 축제를 접목하려는 의도를 가지고 있었는데, 주민들 간의 갈등으로 인해 서로 눈치를 보면서 아무도 교육대상자로 자원하지 않는 점이었다. 주민들은 비협조적인 데에 반해서 작년에 함께 했던 예술가들은 오히려 기다렸다는 듯이 흔쾌히 동참해주었습니다. 하지만 거듭되는 접촉을 통해 주민들은 마을을 열기 시작했고 이후 예술가들의 헌신적인 노력과 여러 번의 교제를 통해 주민들은 교육을 즐기면서 축제를 기다리게 되었다. 축제의 프로그램에는 큰 변화는 없었지만, 사진전시 또는 길놀이 프로그램을 주민이 함께 준비하면서 그들의 역할과 역량은 점점 커져가고 있었다.

### **[03-3 월월축제 그 세번째 이야기] 재개발 바람과 함께 퇴색 되어가는 월월축제**

2011 년은 성북구청장이 새롭게 부임하면서 그에 따른 정치적, 경제적 변화(정치·경제적 변화의 해로 선언)에 따라 월월축제 또한 과감한 변신을 모색해야했다. 예산은 반으로 줄었고, 지역에 주택을 소유한 일부 주민들은 오랫동안 시도해온 재개발이 마침내 이루어질 것이라는 기대로 마을축제를 반기지 않았다. 그 마을의 역사, 공간, 삶의 아름다움을 기리는 마을축제는 자칫 마을을 그대로 유지하자는 분위기를 조성할 우려가 있다는 것이 그들의 생각이었다. 그래서 이번에는 북정마을에 최소한의 행사를 남긴 채 축제 본부를 성북글로벌빌리지센터로 옮기고 축제의 컨셉을 새롭게 전환했다. 또한 축제의 장소가 변경됨에 따라 축제의 이름도 ‘북정성곽마을 월월축제’에서 ‘성북동 노을빛 하모니(2011)’로 축제의 이름이 변경되었고, 북정마을을 포함한 주변 성북동 일대를 모두 아우르는 축제로 기획되었다. 북정성곽마을 연극제와 심우장 시낭독만이 북정마을에서 열렸다.

### **[03-4 월월축제 그 네번째 이야기] 위기를 넘어 기회로! 주민이 직접 주최한 월월축제!**

2013 년 성북진경 페스티벌이 성북구 내의 문화예술 콘텐츠를 모두 모아 진행하는 통합형 지역축제로 자리매김하면서 월월축제는 성북진경 페스티벌의 일부로 속하거나 사라질 것으로 보였다. 하지만 예산을 뒤엎고 2013 년의 월월축제는 성북진경의 페스티벌과 별개로 개최되었다. 연초부터 결성된 축제추진위원회는 마을주민들이 직접 참여하고 체험할 수 있는 마을축제를 구성하였다. 축제의 날짜가 정해지자 주민들은 손님맞이 환경개선에 나섰다. 5 월부터 북정마을 구석구석을 청소하고 골목길 화단을 가꾸었으며, 북정마을로 들어오는 입구에 마을 안내도를 설치하여 외부의 방문을 대비하기도 하였다. 6 월부터 9 월까지는 본격적인 축제 준비에 들어갔다. 주민이 중심이 되어 외부의 지원을 받아 축제를 운영하였다. 주민센터, 성북문화재단, 성북구 마을만들기지원센터 등 각종 직능단체로부터 주민들이 직접 후원을 받았다. 주민들은 직접 프로그램을 기획하고 외부의 도움을 받아 다채로운 축제를 만들었다. 3 회 월월축제는 두부·메주 만들기 체험 프로그램, 옛날사진전, 북정노인정 실버댄스스포츠 클럽 등 북정마을다운 축제로 성장하였다. 주민들이 준비한 음식이 마음에서 마음으로 전달되고, 마을사람들 모두의 노력을 알기라도 한 듯 수많은 사람들이 축제에 찾아오고 있습니다. 2014 년에도 2015 년에도 꾸준히.

#### [04 결론] 예술은 도시를 넘어 사람에게 닿는다.

북정마을 월월축제는 축제가 마을에 있어서 매우 중요한 의미를 갖는다는 것을 보여주었다. 마을에는 수많은 주민들과 그들 간의 관계가 존재한다. 게다가 마을과 연관된 많은 단체들이 외부에서 마을을 지원하기 위해 모인다. 따라서 축제를 통해 마을의 내부적 관계와 외부적 관계를 바라봄으로써 마을의 일상을 가장 압축적으로 볼 수 있다. 월월축제는 비록 북정마을 주민이 아닌 국민대학교의 교수에 의해서 시작되었지만, 그녀의 노력이 마을주민들을 일깨우는 불씨가 되었다. 그녀가 북정마을에서 축제를 준비하는 동안 마을에는 많은 변화들이 일어났다. 그들의 예술이 아무도 관심 없던 산골마을에 스며들면서 아기자기한 공간들을 만들어냈고 그 결과 주눅들어 있던 마을의 얼굴에 웃음꽃이 피기 시작했다. 축제를 준비하는 과정에서 주민들의 참여를 불러일으켰고, 그들에게 마을에 대한 자부심을 심어줌으로써 마을을 소중하게 생각하도록 만들었다. 더 나아가 마을주민들뿐만 아니라 행정과 외부인들이 함께 참여하면서 많은 관심을 갖게 하였다. 더 이상 북정마을은 ‘혼자’가 아니었고, 행정과 외부인들과 ‘함께’하는 ‘우리’의 마을로 되살아났다. 축제를 준비하면서 많은 어려움이 있었지만 전화위복하는 과정에서 그들의 역량은 더욱 더 강화되었다. 초기 축제의 주체는 마을주민이 아닌 국민대학교 교수와 학생들이었다. 그들이 북정마을에서 함께하는 동안 마을환경도 바뀌었겠지만 무엇보다 재개발로 인해 벌어져가던 주민들 간의 관계를 회복하고 합심하게 된 것은 단순한 환경개선을 초월하는 것이었다. 더 나아가 국민대학교가 빠져나간 후에도 마을사람들이 주체가 되어 축제를 주최할 정도로 역량이 강화되었다. 북정마을 사람들은 이제 그들의 마을이 자랑스롭다. 어떤 시련이 찾아와도 뚝뚝 뭉쳐 해결해 나갈 것이다. 이처럼 예술은 도시를 넘어 사람에게 닿는다. 도시가 변한다고 반드시 사람이 변하지는 않는다. 그러나 사람이 변하면 도시는 반드시 변한다. 사람을 변화시키는 예술. 그것이 진짜 예술의 역할이 아닐까.

## ライオネル・ファイニンガーの摩天楼表象 ーマンハッタン連作からグラフィック様式へ

佐々木千恵（早稲田大学・修士課程）

---

### はじめに

ニューヨーク出身のライオネル・ファイニンガー（Lyonel Feininger, 1871-1956）は、1887 年以来ドイツ北東部を活動の拠点とし、キュビズムを独自の様式へ発展させたドイツ表現主義の画家として知られる。1930 年代のドイツではナチスによる前衛芸術排斥運動が高まったため、ファイニンガーは 50 年ぶりに故国アメリカへ移住し、マンハッタンに居を定めた。移住後に制作された油彩画の大部分はドイツで描いたスケッチに基づく風景画だったが、マンハッタンを主題としたと思われる作品も 30 点ほど確認されている。本発表では、この一連の作品群をマンハッタン連作と呼び、そのなかでも摩天楼を主題とした作品を中心に考察する。

移住後の油彩画においては、ファイニンガー独自の「クリスタルの」と称される幾何学的な色面による画面構成はみられなくなり、代わりに「グラフィック様式(der graphische Stil)」と呼ばれる、朦朧とした色彩の上に細い線で具体的なモチーフを描く新たな様式が生みだされた。グラフィック様式の本質は、色彩と線描が一つの画面上でそれぞれ独立した空間表現をおこなっているところにある。発表者は、色彩と線描という二つの構成要素を層状に重ね、異なる空間表現を同時におこなうというグラフィック様式の構想が、マンハッタン連作の制作過程で得られたと考える。本発表では、摩天楼を描いたマンハッタン連作の空間表現を分析し、マンハッタンの視覚体験がグラフィック様式の空間表現を生み出す契機となったということを明らかにする。

### 1. ファイニンガーによる摩天楼表象の無名性

ファイニンガーがヨーロッパで活動している間に、マンハッタンでは高層ビルの建設ラッシュがあり、摩天楼が形成されていた。画家は密集した高層ビル群の圧迫感を写真に収めているが、摩天楼を描いた絵画《マンハッタンⅡ》(1940 年)をみると、同時代画家の H. クックや G. オキーフに比べて、摩天楼の高さや、個別のビルの特徴を描きあらわすことには無関心だったといえる。代わりに関心を寄せたのは、ビルの上層部のセットバックによって作り上げられる階段状の輪郭線と、ビルごとに異なるファサードだった。

### 2. 摩天楼を覆う影

《マンハッタンⅠ》(1940 年)では、道の両側に立ち並ぶ高層ビルが中央に向かって V 字型を描き、画中の奥行きは、線遠近法ではなく、書き割りのように重なったビルの前後関係によって示唆されている。ただし、セットバックしたビルの輪郭線は階段状に見えることから、《マンハッタンⅠ》も異なるビルの重なりではなく、一つのビルの輪郭線であるとも考えられる。

さらに《マンハッタンⅠ》には、木のような奇妙な形をした茶色の帯が見えるが、これは道の向かい側に建つビルの影である。セットバックしたビル自体の輪郭線だけではなく、向かい側のビルに投影される影も階段状となり、さらに、影が投影されたビルの外壁も階段状であるため、結果としてファサードに現れる影は、複雑なフォルムをとる。影は《工場》(1950年)といった後年の作品においても、ビルのファサードの造形要素とは無関係に、画面上で黒い平面として現れる。ビルのファサードやビル同士の配置を超越した最上層において、影はすべてを覆う平面として現れており、色面に線描を重ねるというグラフィック様式とは反対に、建築の細部を影の色面で覆うという構造をもっている。

### 3. ファサードによる重層的な空間構成

マンハッタンの夜景を描いた《マンハッタン、夜》(1940年)では、絵画空間におけるビルとこれに付随する窓の配置に特徴がみられる。画面中央のビルでは、そのスカイラインが示す奥行きとは無関係に斜行するファサードにより、ビルの壁面と窓が異なる奥行きを示している。一方、パリの街並みを描いた《高い家並Ⅳ》(1919年)では、壁面同士の空間構成に主眼が置かれ、壁面に対する窓の関係は、画面構成上の問題にはなっておらず、窓は壁面の傾きに合わせて配置されている。

《マンハッタン、夜》にみられる壁面と窓の奥行きの不一致は、摩天楼の夜景を通じて得られた視覚体験に基づくものである。マンハッタンの夜景は、複数のビルが連なって一つのシルエットをつくり、そのシルエットの内側には明るい窓の列のみが浮かび上がる。ただし異なる空間に位置する壁面同士が同一平面のシルエットにまとめられているため、ビルのシルエットがもつ奥行きと、窓の列がもつ奥行きは必然的に異なるものとなる。

パリやドイツの街並みを描いた作品では、壁面同士の空間構成や光線の表現に関心が向けられ、窓は壁面に付随していただけだったが、マンハッタン連作では、様々な角度を向く夥しい数の窓自体に関心が向けられており、窓を壁面から独立させ、異なる奥行きを与えた上で重ね合わせるという新たな空間表現が試みられた。

### おわりに

ファイニンガーによる摩天楼の表象は、高さや個々の特徴を表現するよりも、セットバックとファサードによる複雑な空間を二次元平面化することに主眼が置かれていた。その際、壁面、窓、それらを覆う影といった要素を独立させ、それぞれに異なる奥行きを与え、画面上で層状に統合した。摩天楼の表象を通して獲得した、奥行きの異なる要素を層状に積み重ねる、という空間構成は、色彩と線描に異なる奥行きを与えて層状に重ねる「グラフィック様式」へ至る重要なヒントとなったといえる。

## 라이오넬 파이닝거의 마천루 표상 -맨해튼 연작에서 그래픽양식으로-

사사키 치에 (와세다대학교 ·석사과정)

### 인사말

뉴욕 출신의 라이오넬 파이닝거(Lyonel Feininger, 1871-1956)는, 1887 년 이후, 독일 북동부를 거점으로, 큐비즘을 자신만의 양식으로 발전시킨 독일 표현주의 화가로 알려져 있다. 1930 년대의 독일에서는 나치에 의한 전위예술배척운동의 분위기가 고조되자, 파이닝거는 50 년만에 고향 미국으로 이주해, 맨해튼에 거주하게 된다. 이주 이후에 제작된 유채화 중, 대부분은 독일에서 그린 스케치를 바탕으로 한 풍경화였으나, 맨해튼이 주제라 여겨지는 작품도 30 점정도 확인되고 있다. 이번 발표에서는 이 작품들을 맨해튼연작이라 부르고, 그 중에서도 마천루를 주제로 한 작품을 중심으로 고찰하고자 한다.

이주 후의 유채화에서는, 파이닝거 특유의 “크리스탈적”이라 불리는, 기하학적인 색면에 의한 화면구성이 사라지고, “그래픽양식(der graphische Stil)”이라 불리는. 몽롱한 색채위에 가는 선으로 구체적인 모티브를 그리는 새로운 양식이 탄생한다. 그래픽 양식의 본질은, 색채와 선묘가 하나의 화면위에서 각자 독립한 공간표현을 실시하고 있다는 점에 있다. 발표자는, 색채와 선묘라는 두 구성요소를 층의 형태로 겹쳐서 다른 공간표현을 동시에 실시하는 그래픽양식의 구상이, 맨해튼연작의 제작 과정을 통해 취득한 것이라 생각한다. 이번 발표에서는, 마천루를 그린 맨해튼 연작의 공간표현을 분석하여, 맨해튼의 시각체험이 그래픽양식의 공간표현을 만들어 내는 계기였음을 밝히고자 한다.

### 1. 파이닝거에 의한 마천루 표상의 무명성

파이닝거가 유럽에서 활동하고 있을 때, 맨해튼에서는 고층빌딩의 건설러쉬로 마천루가 형성되고 있었다. 화가는 밀집한 고층빌딩군의 압박감을 사진에 담아내고 있으나, 마천루를 그린 작품 <맨해튼Ⅱ>(1940 년)를 보면, 동시대 화가 H. 쿡과 G. 오키프와 비교해서, 마천루의 높이와 각 빌딩의 특징을 그려내는 것에는 관심이 없었다고 본다. 대신, 화가가 관심을 보인 것은, 빌딩의 위층 부분의 셋백에 의해 만들어지는 계단 형태의 윤곽선과, 빌딩에 따라 달라지는 파사드였다.

### 2. 마천루를 덮는 그림자

<맨해튼Ⅰ>(1940 년)에서는, 거리의 양 옆에 나란히 선 고층 빌딩이, 중앙을 향해 V 자 모양을 그려내고, 화면의 깊이는 선원근법이 아닌, 연극의 무대 배경처럼 겹쳐진 빌딩의 전후 관계를 통해 시사되고 있다. 단, 셋백하고 있는 빌딩의 윤곽선은 계단 형태로 보이고 있는 것으로부터, <맨해튼Ⅰ> 도 다른 빌딩과 겹쳐서가 아닌, 한 빌딩의 윤곽선이라 볼 수 있다.

게다가 <맨해튼 I>에서는, 나무처럼 기묘한 모양의 갈색 띠가 보이나, 이는 맞은편에 세워진 건물의 그림자이다. 셋백한 빌딩 자체의 윤곽선 뿐만 아니라, 맞은편 빌딩에 투영된 그림자도 또한 계단 형태이며, 심지어 그림자가 투영된 빌딩의 외벽도 계단 형태를 띠고 있기 때문에, 결과적으로 파사드에 나타나는 그림자는 복잡한 형태를 갖추게 된다. 그림자는 <공장>(1950 년)과 같은 후기 작품에 있어서도, 건물 파사드의 조형요소와는 관계없이, 화면 위에서 검은 평면으로 표현된다. 빌딩의 파사드와 빌딩사이의 배치를 초월한 최상층에 있어서, 그림자는 전체를 덮는 평면으로 나타나고, 색면에 선묘를 겹친다는 그래픽양식과는 반대로, 건축의 세부를 그림자의 색면으로 덮는 구조를 갖고 있다.

### 3. 파사드에 의한 중층적인 공간구성

맨해튼의 야경을 그린 작품 <맨해튼, 밤>(1940 년)에서는, 회화공간에 있어서 빌딩과 그 창문의 배치에 특징을 갖고 있다. 화면 중앙의 빌딩에서는, 그 스카이라인이 나타내는 깊이와는 관계없이 사선으로 가로지르는 파사드에 의해, 빌딩의 벽면과 창문이 다른 깊이를 보이고 있다. 한편, 파리의 마을경관을 그린 <높은 집들 IV>(1919 년)에서는, 벽면끼리의 공간구성에 초점이 놓여져, 벽면에 대한 창문의 관계는, 화면구성상의 문제가 아니며, 창문은 벽면의 경사에 따라 배치되고 있다.

<맨해튼, 밤>에 보이는 벽면과 창문의 깊이가 다른 것은, 마천루의 야경을 통해 얻은 시각체험이 그 바탕에 있다. 맨해튼의 야경은, 여러 빌딩이 연결되어 하나의 실루엣을 만들며, 그 실루엣의 안쪽에는 밝은 창문만 일렬로 묘사되고 있다. 단, 다른 공간에 위치하는 벽면들이 동일한 평면의 실루엣으로 통합되어, 빌딩의 실루엣이 갖는 깊이와 일렬의 창문이 갖는 깊이는 자연스럽게 다른 것이 된다.

파리와 독일의 마을경관을 그린 작품에서는 벽면끼리의 공간구성과 광선의 표현에 관심을 보이고 창문은 벽면에 부수할 뿐이었으나, 맨해튼연작에서는, 다양한 각도로 바라보고 있는 수많은 창문에 관심을 보여, 창문을 벽면에서 독립시켜 다른 깊이를 준 뒤에 겹쳐내는 새로운 공간표현이 시도되었다.

### 마지막으로

파이닝거에 의한 마천루의 표상은 높이와 각각의 특징을 표현하는 것보다, 셋백과 파사드에 의한 복잡한 공간을 2 차원의 평면으로 만들어 내는 것에 초점이 놓여져 있었다. 그때, 벽면, 창문, 그리고 그것들을 덮는 그림자와 같은 요소들을 독립시켜, 각각에 다른 깊이를 주어, 이들을 화면상에서 층의 형태로 통합시켰다. 마천루의 표상을 통해 획득한 깊이가 다른 요소를 층의 형태로 겹치는 이러한 공간구성은, 색채와 선묘에 다른 깊이를 주어 층의 형태로 겹치는 ‘그래픽양식’으로 도달하는 중요한 힌트가 되었다고 볼 수 있다.

## 都市再生時代の「共感、共有と協力による芸術」 —聖水洞の話

キムスンユン  
金承潤（成均館大学・修士課程）

共同研究者：ソ・ユリム、キム・スンユン(金承潤)、ペク・スンファン(白承桓)、チョン・ウンジュ(全恩主)、  
キム・ヒョンジョン(金賢姪)、ナム・ジヒョン(南智賢)、イ・ギフン(李基薫)、ハン・テヒョン(韓  
太鉉)、アン・ソンミン(安省珉)、ナ・ヨンフン(羅瑢勳)、キム・ジウオン(金智原)、イム・ジョ  
ンフン(林鐘訓)、シン・ハンナ(慎ハンナ)、チョ・ヒウン(趙姫恩)

都市を何でも描けるキャンバスに例えると都市の芸術は「芸術家による芸術」と「共感、共有と協力による芸術」の二種類に分けられる。「芸術家による芸術」は建築、公共芸術、美術館にある作品など芸術家が大衆のために作って都市に建設、設置、展示する芸術であり、「共感、共有と協力による芸術」は人々の共感する心を通じた資源、能力の共有と多主体間の協力で作り上げる芸術である。

今回の発表は「共感、共有と協力による芸術」に関する内容で、都市再生の時代においてこのような芸術がどのように成り立っているのか説明するものである。都市再生とは、環境、文化、歴史などの地域の資源を活用し、都市の空間、社会文化、そして経済的衰退について、その統合的再生を図る活動である。都市再生は人と場所を中心にするので、地域の懸案と課題に共感することから始まる。このような共感が広がって行政にまで伝わると、官民の協力による都市再生が始まる。一方、行政がさきに共感性を形成するために働きかける場合もある。その後、多様な活動や事業が芸術家との共感、共有と協力によって成り立つ場合、都市芸術の形態があらわれる。また、「共感、共有と協力による芸術」は住民自らが芸術家になって生み出すこともある。誰がさきに共感性を形成し、協力体制を構築したかによってその過程は変わるが、再生の必要性について共感し、資源と能力を共有し、協力を通して達成する姿は共通している。

このような「共感、共有と協力による芸術」の事例としてソウル市城東区の聖水洞を取り上げ、「手製靴の話」と「ソーシャル・ベンチャー・バレーの話」という二つの話題に分けて言及したい。

聖水洞はソウルの手製靴産業の 86%を占めるほど手製靴で有名な町で、500 ヶ所に及ぶ手製靴関連の業者がこの地域に存在する。なぜここに手製靴産業が集中しているのかについて、以下に略歴を挙げる。

1925 年完成したソウル駅には貨物を保管する倉庫で皮革が闇取引されており、鹽川橋には靴の修理屋が建ち並び始めた。1953 年の朝鮮戦争以降アメリカ軍の中古軍靴の皮で作った革靴が流行し、いつの間にか、一帯には多くの靴屋が通りを形成していた。以後、文人や芸能人など、ソウル<sup>ソウル</sup>の洒落者たちがこぞって明洞<sup>ミョンドン</sup>に集まるようになるにつれ、靴の中心街は、1960 年から 1980 年代の 20 年間で明洞へと移っていった。

聖水洞の場合、朝鮮戦争以降、城東橋とトゥックソムの間の低湿地が埋め立てられて工場が新設され、1970 年から 74 年にかけては準工業地域に指定された。最初はボールペン、印刷関係の

大きな工場が建てられたが、それらが首都圏に移転した後は、靴産業界の大手である金剛製靴が聖水洞に隣接した金湖洞へ、エスクァイアが聖水洞に入ることになる。これによって、1970年代、金湖洞と聖水洞には数多くの製靴業者がこれら二つの企業の下請けのために建てられた。1978年以降、金剛製靴とエスクァイアは首都圏に移転したが、中小製靴企業たちは金湖洞と聖水洞にその後も残り、1980年代に入ってから聖水洞に集約されていった。その理由は、聖水洞に縫製工場が多く、企業同士の連携に便利であった点、縫製に関わる人員が豊富な聖水洞に皮革副資材業者が集まり始めた点、そして聖水洞に自動車整備業者が集中し、製靴過程で発生する臭いなどが問題視されずに済んだ点にある。それ故聖水洞にはいまだ多くの手製靴関連業者が残っている。

しかし、2000年代に入ってから中国で安価な労働力をもとに生産された低価格の靴が流通して手製靴市場は深刻な不況を経験することになり、外資系SPAブランドまで国内市場に参入し、手製靴はさらに行き場を失っていった。しかしその後、手製靴産業を立て直すための努力が行われることとなる。

2009年聖水洞内の手製靴関連業者たちは力を合わせて、「ソウル城東製靴協会」を設立した。共同で開いた「SSST」、すなわち「聖水手製靴タウン」は2011年優秀町企業に選定されたこともある。また、2011年には城東区庁、靴デザイナー、高校、大学のボランティアと一緒に「聖水洞靴通り」の入り口に壁画を描いた。城東区は地域内の靴デザイナーと数回のミーティングを通してデザインし、公務員まで一緒に出て壁画を描く努力を見せた。2013年からは、聖水洞に「ソウル産業振興院」が主催する小工人特化支援センターがオープンし、聖水洞手製靴産業のために調査、教育、共同販売等の事業を進めた。

しかし、次第に上昇する地価、さらに多様な年齢層をターゲットとする外国ブランドが手製靴産業を圧迫してきた。この時、靴職人たちが自分たちの産業を守ろうと努力する姿を見た朴元市長は、聖水洞を訪問してこのような努力を無駄にしないという考えを持つようになった。

ソウル市、城東区、ソウル・デザイン財団は手製靴関連の業者とともに様々な努力を展開し、手製靴の販路開拓のため、地下鉄の橋脚の間の隙間を改造して作った「FromSS」、聖水手製靴の夢を具現化した「靴のテーマのモニュメント」、「聖水洞、手製靴通り物語」パン、靴のテーマ駅シューズポット聖水（SHOESPOT SEONGSU）などが製作された。

この事例を「共感、共有と協力による芸術」の観点から見ると、手製靴職人の産業を活性化させるための行動によって、共感を形成するきっかけのスイッチが押されたといえる。彼らはその後も、地域の歴史と資源、各自の能力などを共有し協力しあった。こうした聖水洞の話を知らずに見ると、それらはただ簡単な芸術作品、展示、デザインに思えるかもしれない。しかしその背景には、これを作り出すための様々な人々の努力と過程が存在する。これがまさに都市再生時代の芸術である。

次に挙げる聖水洞の「共感、共有と協力による芸術」の事例は、聖水1街2洞の話です。さきの事例と違い、聖水1街2洞では安い地価を活かして、低層住宅街にソーシャル・ベンチャーが入っていった。

ソーシャル・ベンチャーは個人または少数の企業家が社会問題を解決する革新的アイデアを商業化するために設立した企業である。狭い聖水1街2洞にはこうしたソーシャル・ベンチャーが27個も位置しているので、ソーシャル・ベンチャー・ヴァレーと呼ばれることもある。

まずはソウル・グリーン・トラストについて触れたい。ソウル・グリーン・トラストは山林庁所属の非営利財団法人であり都市緑化事業を推進する市民財団である。2003年に設立され、ソウルの森が周辺にあるという理由で、2012年に聖水洞に移転した。



2013 年、ソウル・グリーン・トラストは<sup>ソンズドン</sup>聖水洞の地域社会づくりキャンペーンの一環として「안녕?(こんにちは)。<sup>ソンズドン</sup>聖水洞、ソウルの森 花祭り」を企画し、これは環境の持続的改善、文化行事や共同の空間づくりを通じた共同体活性化などを目的とした祭りであった。祭りには参加者約 2000 人、ボランティア 100 人、協力団体 50 ヶ所という大規模な催しとなった。祭りを準備する過程で、ソウル・グリーン・トラストと協働するため、さまざまなソーシャル・ベンチャーとカフェ、飲食店などが地価の安さを活かし、<sup>ソンズドン</sup>聖水洞に参入するようになった。

こうして始まった<sup>ソンズドン</sup>聖水洞の花まつりは地域の住民、ソーシャル・ベンチャー、地域外の人々との共感を作り出し、多くの人たちが楽しみを分かち合った。皆が参加可能な花関連の様々な教育プログラムも行われた。この時、町を花で染める「今はガーデニングタイム」というプログラムは「共感、共有と協力による芸術」の一環として行われた。2013 年に始まった祭りは現在も続けられている。

都市再生の場合、持続的に取り組むための原動力が最も重要となる。いくら良い活動や事業であっても持続可能性がないと、単発的なものに終わってしまう。このような点で「共感、共有と協力による芸術」はその運営過程において多くの人々に記憶を残し、都市再生の原動力を作ることができる。専門家のようにファッショナブルで美しい作品を作ることはできないが、お互いの考えと心に共感し、資源と能力を共有しながら協力して作っていく過程は、まるで人生にも似て、この芸術は目に見えるものだけでは評価できない価値を持っている。

今後、こうした過程に多くの人々が関心を持ち参加して、より豊かな都市芸術が現れることに期待したい。

## 도시재생 시대의 ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’

### – 성수동이야기

김승윤 (성균관대학교 · 석사과정)

공동연구자 : 서유림, 김승윤, 백승환, 전은주, 김현정, 남지현, 이기훈, 한태현, 안성민, 나용훈, 김지원, 임종훈, 신한나, 조희은

도시를 무엇이든 그릴 수 있는 캔버스라고 봤을 때, 도시의 예술은 ‘예술가에 의한 예술’과 ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’, 두 가지 종류로 나뉘진다고 생각합니다.

‘예술가에 의한 예술’은 건축, 공공예술, 미술관 속 작품 등 예술가는 대중들을 위해 작품을 만들고 이를 도시에 건설, 설치, 전시하는 예술이며, ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’은 사람들의 공감대 형성을 통해 자원, 능력의 공유와 다 주체간의 협력으로 만들어 내는 예술입니다.

이번 발표는 ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’에 관한 내용으로 도시재생 시대에 있어 이러한 예술이 어떻게 이루어지는가에 대해 설명하고자 합니다. 도시재생은 도시의 공간환경, 사회문화, 경제적 쇠퇴를 지역성과 환경, 문화, 역사 등의 지역 자원을 활용하여 물리, 사회, 경제의 통합적 재생을 꾀하는 모든 활동을 말합니다. 도시재생은 사람과 장소를 중심으로 하기 때문에, 지역의 현안과 과제에 대해 공감대를 형성하는 것에서 출발합니다. 이러한 공감대가 확산되어 행정에 미치게 되면, 민관 협력에 의한 도시재생이 시작되며, 행정이 먼저 공감대 형성을 위해 노력하는 경우도 있습니다. 이후, 진행되는 다양한 활동, 사업이 예술가와의 공감, 공유와 협력에 의해 이루어졌을 경우, 도시예술의 형태로 나타나게 됩니다. 또, ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’은 주민 스스로 예술가가 되어 만들어지기도 합니다. 누가 먼저 이러한 공감대를 형성해 나가고 협력체계를 구축했는지에 따라 그 과정은 바뀌지만, 재생의 필요성을 공감하고 자원과 능력을 공유하고, 협력을 통해 이루어가는 모습은 같습니다.

이러한 ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’의 사례로 말씀드릴 내용의 대상지는 서울시 성동구 성수동이며, ‘수제화 이야기’와 ‘소셜벤처벨리 이야기’로 나눠집니다.

성수동은 서울 수제화 산업의 86%를 담당하고 있을만큼 수제화로 유명한 동네입니다. 500 곳이나 되는 수제화 관련 업체가 지역에 위치하고 있기 때문입니다. 왜 이 곳에 수제화 산업이 집중되었는지에 대해 간략한 역사를 알아보자면 다음과 같습니다.

1925 년 완공된 서울역에는 화물 보관 창고가 있었고, 가족들이 밀거래되면서, 염천교에는 구두수선점이 들어서기 시작했습니다. 1953 년 한국전쟁 이후, 미군들의 중고 전투화 가족으로 만든 신사화가 유행하면서 어느 새 염천교 일대에는 많은 구두점들이 골목을 형성했습니다. 이후, 문인들과 연예인 등 서울의 내로라하는 멋쟁이들이 명동으로 몰리면서

구두 중심가는 1960년대부터 1980년대까지 20년간 명동으로 이동했습니다.

성수의 경우, 6.25 한국전쟁 이후 성동교와 뚝섬간의 저습지가 매립되어 공장들이 신설되었고 70년과 74년에 걸쳐 성수동은 준공업지역으로 설정되었습니다. 처음에는 불펜, 인쇄 관련 큰 공장들이 들어왔으나, 수도권으로 이전한 후에는 구두계 대기업인 금강제화가 성수동에 인접한 금호동에, 에스콰이아가 성수동에 들어오게 되었습니다. 이에 따라 1970년대, 금호동과 성수동에는 많은 제화업체가 두 기업의 하청을 위해 입지하게 되었습니다. 1978년 이후, 금강제화와 에스콰이아는 수도권으로 이전했지만, 중소 제화업체들은 금호동과 성수동에 계속 남아있었고, 1980년대에 들어서는 성수동으로 모이게 되었습니다. 이는 성수동에 봉제공장이 많아 기업 간 연계가 편리했던 점, 봉제인력이 풍부한 성수동으로 피혁부자재업체가 집적하기 시작했던 점, 성수동에 자동차정비업체가 몰려 있어 제화 과정에서 발생하는 냄새문제 등이 부각되지 않았던 점 때문입니다. 이러한 이유로 성수에는 여전히 많은 수제화 관련 업체가 남아있습니다.

하지만, 2000년대에 들어서는 중국에서 저렴한 노동력을 바탕으로 생산된 저가 신발이 유통되며 수제화는 큰 불황을 겪게 되었고, 외국계 SPA 브랜드까지 국내 시장에 파고들며, 수제화는 더욱 설 자리를 잃어갔습니다. 하지만 이후, 수제화 산업을 살리기 위한 노력들이 이루어집니다.

2009년 성수동 내 수제화 관련 종사자들은 힘을 합쳐 ‘서울성동제화협회’를 설립하였습니다. 함께 차린 SSST, 성수수제화타운은 2011년 우수마을기업으로 선정되기도 했습니다. 또한, 2011년에는 성동구청, 구두 디자이너, 고등학교, 대학교 자원봉사자가 함께 ‘성수동 구두거리’ 초입부분에 벽화를 그리기도 하였습니다. 성동구는 지역 내 구두 디자이너와 여러 차례 미팅을 통해 디자인하고, 공무원까지 함께 나와 벽화를 그리는 노력을 보이기도 했습니다. 2013년부터는 성수동에 서울산업진흥원이 주관하는 소공인 특화지원센터가 문을 열었고, 성수동 수제화 산업을 위한 조사, 교육, 공동판매 등의 사업을 진행하였습니다.

하지만, 점차 상승하는 임대료, 더욱 다양한 연령층을 겨냥해오는 외국브랜드까지 수제화 산업을 압박해왔습니다. 이때, 수제화 장인들이 자신들의 산업을 지키고자 노력하는 모습을 본 박원순 시장은 성수동을 방문하고, 이러한 노력을 헛되게 하지 않겠다는 생각을 가지게 됩니다.

서울시, 성동구, 서울디자인재단은 수제화 관련 종사자와 함께 다양한 노력을 전개합니다. 이때, 수제화 판로를 개척하고자, 지하철 교각 사이 자투리 공간을 개조해 만든 FromSS, 성수 수제화의 꿈을 표현한 구두테마 상징 조형물, ‘성수 수제화거리 이야기’ 판, 구두테마역 슈스팟성수 등이 만들어지게 됩니다.

‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’의 관점에 바라봤을 때, 이 사례는 공감대 형성의 첫 단추를 수제화 장인들이 모여 산업의 활성화를 위한 움직임을 보인 것으로 생각할 수 있습니다. 이후, 지역의 역사와 자원, 각자의 능력 등을 공유하고 협력했습니다. 이야기 없이 바라봤다면, 그저 간단한 예술작품, 전시, 디자인으로 생각할 수 있습니다. 하지만, 그 뒤에는 이를 만들어내기 위한 여러 사람들의 노력과 과정이 함께합니다. 이것이 바로

도시재생 시대의 도시예술입니다.

다음으로 말씀드릴 성수동 내 ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’ 사례는 성수 1 가 2 동의 이야기입니다. 저렴한 임대료를 바탕으로 수제화 산업이 들어온 앞선 사례와 달리, 성수 1 가 2 동에는 저렴한 임대료를 바탕으로 저층주거지에 소셜벤처가 들어왔습니다.

소셜벤처는 개인 또는 소수의 기업가가 사회문제를 해결할 혁신적 아이디어를 상업화하기 위해 설립한 기업입니다. 크기가 작은 성수1가2동에는 이러한 소셜벤처 27 개나 위치해 있기 때문에 성수 1 가 2 동은 소셜벤처벨리라고 불리기도 합니다.

이야기는 서울그린트러스트에서부터 시작됩니다. 서울그린트러스트는 산림청 소관 비영리재단법인이며 도시녹화사업을 추진하는 시민재단입니다. 2003 년 설립되었으며, 성수동에 들어오게 된 것은 2012 년입니다. 주변에 위치한 서울숲과 거리가 가까워 이전하게 되었다고 합니다.

2013 년 서울그린트러스트는 성수동 지역사회 가꾸기 캠페인의 일환으로 ‘안녕?성수동 서울숲 동네꽃축제’를 기획합니다. 물리적 환경의 지속적 개선, 문화행사 및 공동의 공간 가꾸기를 통한 공동체 활성화 등을 목적으로 한 축제였습니다. 축제는 참가자 약 2000 명, 자원봉사자 100 명, 협력단체 50 곳이라는 큰 규모로 이루어졌습니다. 축제를 준비하는 과정에서, 서울그린트러스트와 함께하기 위해 다양한 소셜벤처와 카페, 음식점 등이 저렴한 임대료를 바탕으로 성수동에 들어오게 됩니다.

그렇게 시작된 동네꽃축제는 지역주민들, 소셜벤처, 외부인과의 공감대를 만들어냈고, 많은 이들이 축제를 함께 즐겼습니다. 모두 함께할 수 있는 꽃과 관련된 다양한 교육도 있었습니다. 이때, 동네를 꽃으로 물들이는 ‘지금은 가드닝타임’ 프로그램은 ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’의 하나로 진행되었습니다! 2013 년의 축제는 최근까지 이어지고 있습니다.

도시재생의 경우, 이를 지속할 수 있는 원동력이 가장 중요합니다. 아무리 좋은 활동, 사업도 이어지지 못한다면 단편적으로 끝날 수 밖에 없기 때문입니다. 이러한 점에서 ‘공감, 공유와 협력에 의한 예술’은 과정에 있어 많은 이에게 기억을 남기고, 도시재생의 원동력을 만들어 줍니다. 전문가처럼 멋있고, 아름다운 작품을 만들 수 없지만, 서로의 생각과 마음을 공감하고, 자원과 능력을 공유하며, 상호 협력해 만들어내는 과정은 삶의 모습을 닮았기에, 이 예술은 보이는 것만으로는 평가할 수 없는 가치를 가지고 있습니다.

앞으로는 이러한 과정에 많은 사람들이 관심을 가지고 참여해 더 풍요로운 도시예술이 나타나길 기대합니다. 감사합니다.

## 都市の労働者としての踊り子 —エドガー・ドガの 1870 年代末における作風の変化

菅野美奈子（早稲田大学・博士課程）

---

### はじめに

エドガー・ドガは、その生涯でバレエを主題とした作品を 600 点以上も制作し、「踊り子の画家」として広く知られている。なかでもパリ・オペラ座の舞台上で華やかに舞う踊り子たちの姿を捉えた作品が有名だが、彼は稽古場や舞台袖といった表舞台とは異なる場での彼女たちの様子も精力的に描いた。1880 年の第五回印象派展に出品された作品には、稽古場にいる踊り子たちの疲弊した様子が描かれていた。この発表では、第五回印象派展に焦点を当てることで、一連の作品を当時の文脈のなかで捉え直し、これまで十分に指摘されてこなかったそれ以前の同主題作品との違いや、他の展示作品との関連性について考察する。これらを通じて、労働者としての踊り子の表象がどのようにして生みだされたものであったか検討していきたい。

### 1. 第五回印象派展に出品された踊り子の作品

第五回印象派展は 1880 年 4 月 1 日から 30 日までの 1 か月間、パリで開催された。展覧会カタログからは、ドガが当初、絵画 8 点、デッサン 2 点、エッチング、そして彫刻 1 点を出品しようと考えていたことが確認できる。ところが、画家は予定を大幅に変更し、絵画 4 点とデッサン 2 点、そしてカタログには記載のなかった絵画 2 点を加えて出品した。

なかでも踊り子を主題とした作品は 3 点にのぼり、ドガの展示の中心を占めていた。3 点の作品に共通するのは、稽古場という場所が絵画の主題として選ばれていながら、稽古を受けていない、あるいは練習していないときの踊り子たちが描かれているという点である。このような主題は 1870 年代末に登場し、先行作品から派生したものでありながら、それらとの違いが際立つまでに追求されたものであった。

第五回印象派展に関する批評を読むと、踊り子作品は多くの観者を不快にさせていたことがわかる。しかし一方で、こうした表現こそが現実に即した芸術であると称賛する者も少なくなかった。踊り子たちの姿勢と彼女たちの労働、つまり稽古や練習との関連性を示唆している批評は多く、踊り子として生きていくには過酷な労働に耐えなければいけなかったことが認知されていたようだ。しかしながら、当時の一般的な踊り子の表象はそうした現実を隠していた。ドガの作品は意図的に退けられていた踊り子の人間的な側面を暴き出していたのである。

当時の踊り子たちの多くは貧しい労働者階級の出身であったことが判明している。そうした家庭の娘たちにとって、オペラ座のバレエ学校に通うことは貧困から抜け出すためには打ってつけ

の選択肢であった。踊り子という職業は、修行期間こそ低賃金だが、それを終えれば安定した収入を得ることができた。例えば、13 歳頃の少女たちが就く最も低い階級の給料でさえ、洗濯女やアイロン女の年収に相当する額であったという。しかし将来的に高額な給料が保証されていた反面、その労働は過酷なものであった。踊り子たちは、仕事中心の生活を宿命づけられていたのである。

第五回印象派展出品作に描かれていた稽古場にいる踊り子たちは 10 代前半であったと考えられている。つまり彼女たちはそれなりの収入を得ていたわけだが、その金額は他の職業と同程度に過ぎず、経済的に余裕のある生活を送るには不十分であった。彼女たちの日常的な疲労は、身体 of 酷使に加えて、精神的な焦りや充足感の欠如によって一層ひどかったと想像される。ドガが描いたのは、幼い年頃でありながら踊り子の新人として懸命に働く少女たちの姿だったのである。

## 2. 都市で働く女性たちと踊り子

こうした労働者としての踊り子の表象は、それまでの踊り子作品とは一線を画したものであった。ドガはなぜ、踊り子のそのような側面に関心を寄せたのだろうか。ここからは視点を変えて、ドガ作品における女性労働者の表現について考えていく。

第五回印象派展には踊り子作品の他に、身繕いする女性を描いたものも展示されていた。ここで、この作品について考察し、踊り子作品との間に密やかなつながりが存在した可能性を指摘したい。

現在《就寝》という題名で知られるこの作品は、こちらに背を向け鏡を見ながら寝支度をする女性の様子がパステルの素早い筆致で描かれている。なぜドガはこのような荒々しい筆致で女性を描いたのだろうか。この女性はいったいどのような存在なのだろうか。

この作品には、彼女の社会的な身分を知る手がかりが一見して乏しいように思われる。そこで、作品が第五回印象派展に展示されていた 1880 年 4 月の時点にまで遡って考えてみたい。このとき同じ会場には同じ主題で類似した構図のベルト・モリゾの作品が、そのうえ同じ時期に開催されていたエドゥアール・マネの個展においても、二人のものと非常に類似した作品が展示されていた。ドガ、モリゾ、マネの描いた女性はそれぞれ身に着けている衣服が異なり、違った雰囲気をもっている。これら 2 点と比較すると、ドガの女性は労働者階級であったと推察できるだろう。

《就寝》に描かれた女性労働者と下級の踊り子として働く少女たちとの間には、年収が 1000 フランに満たない金額であったという共通点が見いだせる。この額の給料では経済的な充足感を得ることはできなかったと思われる。つまり、ドガの関心はどんなに働いても心身ともに満たされることを知らない女性たちに向けられていたのである。

ドガは 1860 年代後半以降、洗濯女やアイロン女といった都市で働く女性たちの様子を描き続けていた。しかし、第五回印象派展に出品された労働者としての踊り子の作品、および労働者階級と思われる女性の身繕いの場面を描いた作品は、これまでの作風とは全く異なる様相を呈していた。彼は 1870 年代末頃、労働者階級をテーマにした新たな表現を模索していたのではないだろうか。第五回印象派展の出品作はこうした共通の問題意識に基づいて生み出されたものであったと考えられるだろう。

## 도시의 노동자로서의 발레리나 에드가 드가의 1870년대말에 보이는 작품의 변화

칸노 미나코 (와세다대학교 · 박사과정)

---

### 인사말

에드가 드가는, 일생에 발레를 주제로 한 작품을 600 점 이상 제작하여, “발레리나의 화가”로서 널리 알려져 있다. 그 중에서도 <스타>라는 작품처럼 파리의 오페라극장을 무대로 화려하게 춤추는 발레리나들의 모습을 그린 작품이 유명하나, 그는 발레 수업이나 무대 뒤의 모습과 같이, 정식 무대와는 다른 장소에서 그녀들의 모습 또한 정력적으로 그렸다. 1880년의 제 5 회 인상파전에서는, 그러한 무대 뒤의 발레리나들을 제재로 한 작품이 전시되었다. 이번 발표에서는 1880년의 제 5 회 인상파전에 초점을 맞춰, 일련의 작품을 당시의 문맥 속에서 재검토하고, 지금까지 선행연구에서 충분히 언급되지 않았던 같은 주제를 지닌 작품과의 차이와, 다른 전시작품과의 관련성에 대해 고찰하고자 한다. 이를 통해, 노동자로서의 발레리나의 표상이 어떤 식으로 태어났는지 검토하고자 한다.

### 1. 제 5 회 인상파전에 출품된 발레리나의 작품

제 5 회 인상파전은 1880년 4월 1일부터 30일까지의 한 달간, 파리에서 개최되었다. 전람회 카탈로그를 통해, 드가가 당초, 회화 8 점, 데생 2 점, 에칭 1 점, 그리고 조각 1 점을 출품하려고 했던 것을 확인 할 수 있다. 그러나, 화가는 당초의 계획과는 달리, 회화 4 점과 데생 2 점, 그리고 카탈로그에는 없었던 회화 2 점을 추가해서 출품하였다. 그 중에서도 발레리나를 주제로 한 작품은 3 점이며, 드가의 전시의 중심이 되었다.

이 3 점의 작품에서 보이는 공통점은, 발레 학교라는 장소를 회화의 주제로 택하면서도, 수업을 듣고 있지 않은, 혹은 연습하고 있지 않을 때의 발레리나들이 묘사되고 있는 점에 있다. 이러한 주제는 1870년대말에 등장하여, 이전 작품에서 파생된 것 이면서도, 그 차이가 뚜렷하게 나타난다.

제 5 회 인상파전에 관한 비평을 읽으면, 이와 같은 발레리나의 작품은 많은 감상자들에게 불쾌함을 주었다는 것을 알 수 있다. 하지만 한 편에선, 이러한 표현이야말로 현실을 직시한 예술이라 칭찬하는 사람들도 적지는 않았다. 발레리나의 자세와 그녀들의 노동, 즉 발레 수업이나 연습과의 관련성을 시사하고 있는 비평들이 많았으며, 발레리나로서 살아가기 위해서는 가혹한 노동에 견뎌내야만 했다는 점을 어느 정도 인지할 수 있었다고 생각한다. 그러나, 당시의 일반적인 발레리나의 표상은 그러한 현실을 감추고 있었다. 드가의 작품은, 의도적으로 회피해왔던 발레리나의 인간적인 측면을 폭로하고 있었던 것이다.

당시의 발레리나들의 대부분은 가난한 노동자계급 출신으로 판명되고 있다. 그러한 가정속에서 자란 소녀들에게 있어서, 오페라 극장의 발레학교에 다니는 것은 빈곤에서 헤어 나오기 위한 최선의 선택이었다. 발레리나라는 직업은, 수행기간에는 매우 낮은 임금이지만, 이를 마치면 안정적인 수입을 얻을 수 있었다. 예를 들어, 13 살 정도의 소녀들이 일하는 가장 낮은 계급조차, 빨래나 다리미질을 직업으로 하는 여성의 연 수입과 같은 수준의 금액을 받았다. 그러나 장래에 고액의 급료를 받는 것이 보증되는 반면, 그 노동은 가혹한 것이었다. 발레리나들에게 있어서, 일 중심의 생활은 숙명이나 다름이 없었다.

제 5 회 인상파전출품작에 그려진 발레 학교에 있는 발레리나들은 10 대 초반으로 여겨진다. 즉 그녀들은 어느 정도의 수입을 얻고 있었으나, 그 금액은 다른 직업과 같은 수준에 불과하고, 경제적으로 여유 있는 생활을 보내기엔 불충분했다. 그녀들의 일상적인 피로는, 몸을 혹사시킴과 동시에 정신적인 초조함과, 충족감의 결여로 인해 한 층 더 가혹했을 것이다. 드가가 그린 것은, 어린 나이에도 불구하고 발레리나의 새내기로서 열심히 일하는 소녀들의 모습이었던 것이다.

## 2. 도시에서 일하는 여성들과 발레리나

이러한 노동자로서의 발레리나의 표상은, 지금까지 그린 발레리나 작품과는 분명히 다른 것이었다. 드가는 왜, 발레리나의 이러한 측면에 관심을 보였던 것일까? 지금부터는 시점을 바꿔, 드가의 작품에 있어서의 여성노동자의 표현에 대해 생각해 본다.

제 5 회 인상파전에는 발레리나를 그린 작품 이외에, 몸단장을 하는 여성을 그린 작품도 전시되고 있었다. 여기서 이 작품에 대해 고찰하여, 발레리나작품과의 숨겨진 연관성이 존재했다는 가능성에 대해 지적하고자 한다.

현재 <취침> 이라는 이름으로 알려진 이 작품은, 등을 돌려 거울을 보면서 잘 준비를 하는 여성의 모습이 파스텔의 빠른 터치로 그려져 있다. 왜 드가는 이와 같은 거친 터치로 여성을 묘사한 것일까. 이 여성은 도대체 어떤 존재였을까.

이 작품에는, 그녀의 사회적인 신분을 알 수 있는 실마리가 언뜻 보면 부족하다. 그래서, 이 작품이 제 5 회 인상파전에 전시된, 1880 년 4 월의 시점까지 거슬러 올라가서 생각해 보고자 한다. 이때 같은 회장에서는, 같은 주제로 유사한 구도의 베르트 모리조의 작품과, 같은 시기에 개최된 에두아르 마네의 개인전에 있어서도, 두 사람의 작품과 매우 유사한 작품이 전시되었다. 드가, 모리조, 마네가 그린 여성은 각각 착용하고 있는 의상이 다르며, 다른 분위기를 갖고 있다. 이 두 작품과 비교하면, 드가가 그린 여성이 노동자계급이었다는 것을 알 수 있다. <취침> 에서 그린 여성노동자와 하급의 발레리나로서 일하는 소녀들과의 사이에는, 연수입이 1000 프랑에 보다 적은 금액이었다는 공통점을 발견할 수 있다. 이 금액의 급료로는 호화로운 생활을 바라기는 어렵고, 경제적으로 충족감을 얻을 수는 없었을 것이다. 즉, 드가의 관심은, 아무리 일해도 육체와 정신, 모두 충족시킬 수 없었던 여성들에게 향하고 있었던 것이다.

드가는 1860 년대 후반 이후, 빨래나 다리미질을 하는 여성처럼, 도시에서 일하는 여성들의 모습을 계속해서 그려왔다. 그러나, 제 5 회 인상파전에 출품된 노동자로서의 발레리나의



작품, 그리고 노동자 계급이라 생각되는 몸단장을 하고 있는 여성을 그린 작품은, 지금까지의 작품과는 전혀 다른 양상을 보이고 있다. 그는 1870년대말경에, 노동자계급을 테마로 한 새로운 표현을 모색하고 있었던 것이 아닐까. 5회 인상파전의 출품작은 이러한 고통의 문제의식을 바탕으로 태어난 것이라 생각한다.

## 若い力と共に行う都市再生

### —「弘大 歩きたい通り」と「京義線 森の道」の話

キムヒョンジョン  
金賢 妊（成均館大学・修士課程）

共同研究者：キム・スンユン（金承潤）、ベク・スンファン（白承桓）、チョン・ウンジュ（全恩主）、チェ・ソンジェ（崔禎宰）、イ・ジミン（李智珉）イ・ギフン（李基薫）、アン・ソンミン（安省珉）、ナ・ヨンフン（羅瑢勳）、キム・ミンギョン（金閔慤）

#### 0. プロローグ

都市と美術？一般的には、このふたつの間に関連性を見出すのは難しいことだろう。都市とは様々な人が集まって暮らす日常の空間である。暮らしの場であり仕事の場でもありながら、憩いの場にもなる。この都市という空間と美術は思いのほか密接な関係にあるということを、ソウルの「弘大 歩きたい通り」と「京義線 森の道」の例を通して説明したい。都市と美術、このふたつからは、「若い力」というキーワードが想起される。

#### 1. 若さとは何か？

若さ（젊음）という言葉は辞書で引くと、「華盛りの年頃」、「血の気が旺盛」、「実年齢よりも若く見えること」と書かれている。私たちが「若い力」と聞いて浮かべるのは、主に「幼くて、まだ自由な時期」である。そして若いというのは表現することにためらいがなく、表現の仕方が強いという特徴がある。

#### 2. 都市再生において「若い力」とは何を意味するのか？

都市における「若い力」とは、何を意味するのか。それはふたつに分けて解釈できる。ひとつは新興する都市、そしてもうひとつは再興する都市である。近年ソウルで急浮上している「都市再生」という言葉は、荒廃した古い家屋が密集する衰退した地域に、新たな活力を吹き込むことを意味する。都市再生をする時、最も大切なのは人である。地域によって状況は異なるが、一般的に住民は若者が自分たちの住む地域に流入することを望んでいる。実際、若者が集まり活動をはじめたことで、その地域がひとりでの活気を取り戻した事例もある。このように若者が再生の中心となり活動する時には、様々な試みが行われ、芸術として昇華されることもある。

#### 3. 今日私たちが共に歩くソウルの道は？

芸術と若い力に満ちあふれた「弘大 歩きたい通り」、都市の中で再生と若い力が共有する「京義線 森の道」、若い力が集まって作られた創作空間と、変化する路地裏「東進市場」につ

いて紹介したい。若い力、都市、美術、再生。この四つのキーワードがそれぞれの場所でどのように現れているのか、探してみよう。

#### 4. 「若い力」を持つ弘大、芸術をまとう

「弘大 歩きたい通り」は連日若者が絶えない、韓国で最も勢いのある場所である。ここは若者の文化に身近に触れることのできる文化空間であり、2000年代ソウル市と麻浦区の主導で廃線となった元唐人里線の鉄道の一部を再開発した場所である。500mの区間に公園を造成し、所々設置された造形とデザイン、小さい広場、そこそこで開かれる様々な路上ライブなど、調和の取れた姿が通りを歩く人々に安らぎと楽しみをもたらす。

若者にとって「弘大」という言葉は「弘益大学」そのものを意味すると同時に「弘大周辺の文化空間」を意味する。弘益大学で美術を専攻する学生たちを中心に一帯の文化が始まり、おしゃれなカフェやインディーズバンドの文化も花を咲かせ、2000年代からは「弘大」といえばクラブを思い浮かぶほど若者の文化として位置づけられるようになった。近頃は「弘大」一帯に商業施設が建てられ、見どころ、食べもの、買い物スポットなどの娯楽に満ち、いつも若者でにぎやかな街である。

#### 5. 「京義線 森の道」と「若い力」の出会い

2005年ソウル市は地域を区切っていた京義線の線路を地下化させる事業を推し進めた。この事業で生じた総6.3kmの路線跡地を公園に変え、地域を緑化しコミュニティを活性化させるために、様々な努力があった。路線跡地周辺はとても立ち後れていて再生が必要であり、歩行環境も劣悪だったため地域間の交流と意思疎通が必要であった。そのため事業を進行する時、公園化を通した周辺地域の変化を予測し、みだりな開発を防ぎ、公共の資産で公園を維持した。そして画一的な開発ではなく、地域の特性に合った快適な都市環境を作る取り組みが行われた。また、役目を終えた廃線路に住民に必要な施設を導入することで、持続可能な公園を造成し、住民と共に空きスペースを満たして手入れしながら公園づくりを行い、廃れていた鉄路に新たな活力を与える再生プロジェクトとなった。その結果、「京義線 森の道」には新しい若い力が生まれた。ヨントラルパーク(ヨンナムドン+セントラルパーク)といわれる延南洞区間は「弘大」繁華街の延長線上にあり、路上ライブや芸術によって散策路が美しく彩られ、若者のデートスポットとして活気にあふれている。それにより森の道の周辺におしゃれで雰囲気の良いカフェや美味しいお店が次々と現れ、「京義線 森の道」の若い力は地域に変化をもたらした。

#### 6. 「若い力」に染まった「東進市場」

若い活気と魅力あふれる延南の「東進市場」は小さなカフェや素朴で懐かしい食堂、そして若いアーティスト達の作品で活気と魅力あふれる、特色のある空間として話題のスポットである。また、「東進市場」は七日市の形で毎週土曜日に開かれ、都市の中の製造業の活動が新しい価値

と持続可能な環境のための空間造成を通して、生産者と消費者の連帯や協力、循環のモデルを模索している人々が集まる場所でもある。また毎年2回「弱光条件芸術祭」が開かれる。影の中でも生きていくための最小限の灯りという名のこのお祭りでは、アーティスト達が「東進市場」という空間の空気を感じ取るために2週間ごとに集まり、作品が広まることを願いながら準備を行う。このような東進市場<sup>ドンジンシジャン</sup>の空間の変化と若い力の流入を通し、周りの路地も変わりはじめた。市場の路地裏では、古いが独特の雰囲気を感じることでできるかわいらしいお店が徐々にオープンし始め、その個性あるインテリアと静かな雰囲気は口コミで評判となった。昔ながらの情趣を残したカフェ、本屋、ギャラリーは古い食堂、金物屋、クリーニング店など20年以上この場所を守ってきたお店と共存している。東進市場<sup>ドンジンシジャン</sup>を中心に若い力はまた別の若い力を引き寄せるのである。

## 7. Hot Place と共にするジェントリフィケーション

しかしここで注目すべき点は、このような Hot Place(流行り、トレンド、注目の場所、ホットスポット)に必ずと言っていいほど、ジェントリフィケーション(Gentrification) という残念な現象が起こってしまうことである。この言葉は、地域の変化により多くの人々から注目を受けことで自然と経済的変化が生じ、住民が賃貸料上昇によって、追い出されて住む所をなくす現象のことを指す。地域が再生し、若さがあふれるのはいいことだが、それに伴って起きてしまうジェントリフィケーションはとても残念な現象である。

そこで延南洞<sup>ヨンナムドン</sup>では「まちを生かす空間共有プロジェクト\_オッチョダカゲ(偶然出会ったお店)」という取り組みを行った。様々な才能やスキルをもつ人々が集まって共同の商業空間を創出し、長期賃貸を保障し、家賃を5年間上昇しない固定制とした。またコンテンツの企画やプラットフォームを提供している。それにとどまらずアーティストと共同体が地域の住民と共にフリーマーケットやアートスクールなど地域再生に影響を及ぼす活動をしている。このように、小さなアイデアや変化が地域の価値を高めているのである。

## 8. あらためて、「若い力」とは？

「若さ」という言葉は、一般的に我々が思うよりも強い力を持っている。小さな若い力が別の若い力を引き寄せ、それによって地域が変化し、周りの人々も変わることを、今回、直接見て感じる事ができた。これからも多くの若い力が特色と個性をもっていつも新しく地域の人々と通じ合う都市になることを願います。

「若さを愛するものが若さを最も長く保つ。若さは芸術のひとつだ」

「考える「？」と行動する「！」がひとつになる時、若さはよみがえる」

## 젊음과 함께하는 도시재생

### - 홍대 걷고 싶은 거리, 경의선 숲길 이야기-

김현정 (성균관대학교 · 석사과정)

공동연구자 : 김승윤, 백승환, 전은주, 최정재, 이지민, 이기훈, 안성민, 나용훈, 김민경

#### 0. 프롤로그

도시와 미술? 흔히 사람들은 두 가지가 무슨 관련이 있는지 의아할 것입니다. 도시란 다양한 사람들이 모여 함께 살아가는 일상의 공간입니다. 삶터이자 일터이자 놀이터이며서 쉼터가 됩니다. 그런 도시라는 공간과 미술은 생각보다 밀접한 관계가 있다는 것을 오늘 소개하고자 하는 서울의 ‘홍대 걷고싶은 거리, 경의선 숲길’을 통해 설명 드리려고 합니다. 도시와 미술, 그리고 두 장소를 떠올렸을 때 저는 [젊음]이라는 키워드를 찾을 수 있었습니다.

#### 1. 젊음이란 무엇인가?

‘젊다’라는 사전적 정의는 ‘나이가 한창때에 있다’, ‘혈기 따위가 왕성하다’, ‘보기에 나이가 제 나이보다 적은 듯하다’라고 합니다. 우리가 흔히 젊음이라는 것을 떠올릴 때 ‘나이가 어리고, 아직 자유로운 시기’이런 식으로 생각을 하게 됩니다. 그리고 젊다는 것은 표현하는 것에 익숙하고, 표현방식이 강하다는 특징이 있습니다.

#### 2. 도시재생에서 젊음은 무엇을 의미하는가?

그렇다면 도시에서의 젊음은 무엇을 뜻할까요? 두 가지로 해석할 수 있습니다. 첫째는 새롭게 생겨나고 있는 젊은 도시, 그리고 둘째는 다시 살아나고 있는 젊은 도시입니다. 요즘 서울에서는 ‘도시재생’이라는 말이 급격히 떠오르고 있습니다. 너무 오래되고 낡은 집들이 모여 있는 쇠퇴된 지역에 새로운 활력소를 불어넣어주는 일입니다. 도시재생을 할 때, 가장 중요한 것은 사람입니다. 지역마다 상황은 다르지만, 일반적으로 그 곳의 주민들은 젊은 사람들이 지역에 들어오기를 원하고 있습니다. 또한 실제로 젊은 사람들이 스스로 모여 무언가 활동을 지역 내에서 할 때, 그 지역은 자체적으로 활력을 되찾게 되는 사례들도 생겨나고 있습니다. 이렇듯 젊은 사람이 재생의 주체로 나서게 될 때에는 다양한 시도들이 이루어지고, 이런 시도들 중에는 예술로 승화되는 경우도 많이 있습니다.

#### 3. 오늘 우리가 함께 걸어볼 서울의 거리는?

그래서 오늘 저는 예술과 젊음으로 물들어진 ‘홍대 걷고싶은 거리’, 도시 속 재생과 젊음이 함께하는 ‘경의선 숲길’, 젊음이 스스로 모여만든 창작 공간과 변화하는 뒷골목 ‘동진시장’을

소개하려고 합니다. 젊음, 도시, 미술, 재생. 이 네가지 키워드가 각각의 장소에서 어떻게 나타나는지 함께 찾아보면 좋을 것 같습니다.

#### 4. 젊음의 홍대, 예술을 입다

홍대 걷고싶은 거리는 연일 젊은이들의 발걸음이 끊이지 않는 단연 한국에서 가장 핫한 장소일 것입니다. 이 곳은 젊은이들의 문화를 가장 잘 엿볼 수 있는 문화공간입니다. 2000년대 서울시와 마포구의 주도로 폐선된 당인리선의 철길 일부는 걷고싶은 거리로 조성되었습니다. 500m 구간을 공원형태로 조성하여 만들어 졌으며, 곳곳에 설치된 조경과 디자인 조형물, 자그마한 광장들, 곳곳에서 펼쳐지는 크고 작은 거리공연들이 조화를 이루어 걷는 이들로 하여금 편안함과 즐거움을 주는 거리입니다. 젊은이들에게 ‘홍대’라는 명사는 ‘홍익대학교’그 자체를 의미하는 것과 동시에 ‘홍대 주변 일대의 문화공간’을 의미하게 됩니다. 홍대 미대를 중심으로 문화가 시작되었고, 고급스러운 카페와 인디밴드가 홍대 문화의 꽃을 피우게 되었고, 2000년대부터는 홍대하면 클럽 이라는 단어가 떠오를 정도로 젊은 문화의 중심으로 자리잡게 되었습니다. 최근엔 상업시설이 홍대 일대를 장악하게 되고, 볼거리, 즐길거리, 먹거리, 살거리 모든 것들이 있는 거리로 항상 젊음이 붐비고 있는 곳입니다.

#### 5. 경의선 숲길과 만난 젊음

2005년, 서울에서는 지역의 단절요소 였던 경의선철길을 지하화하는 사업을 진행하게 됩니다. 이 사업으로 생긴 총 6.3km의 지상부 폐철로를 공원으로 바꾸어 지역의 부족한 녹지를 확충하고 커뮤니티를 활성화시키기 위한 다양한 노력들이 있었습니다. 철길을 주변으로 도시공간이 매우 낙후되어 재생이 필요했고, 보행환경이 열악하여 지역간 소통이 필요했습니다. 그래서 사업 진행시 공원화를 통한 주변지역의 변화를 예측하고, 무분별한 개발을 막아 공공의 자산으로 공원을 유지했고, 획일적인 개발보다는 지역의 특성에 맞는 쾌적한 도시환경을 조성하고자 했습니다. 또한 주민들이 필요한 시설을 넣어 지속가능한 공원을 조성하고, 비워진 곳을 시민과 함께 채우고 가꾸어 가는 공원가꾸기를 시행했습니다. 그리하여 수명을 다한 폐철길에 새로운 생명을 불어넣는 재생 프로젝트가 되었습니다. 이에 따라 이 곳 경의선 숲길에는 새로운 젊음들이 생겨났습니다. 연트럴파크라고 불리는 연남동 구간은 홍대 변화가의 연장선으로 공연예술로 인해 활력이 넘치는 곳으로 변화하였고, 아름다운 산책로 조성으로 인해 젊은이들이 데이트 코스로도 많이 찾고 있습니다. 이에 따라 분위기 좋은 카페나 맛집들이 숲길 주변으로 생겨나게 되고, 자연스레 경의선 숲길의 젊음은 또 지역을 변화시키고 있었습니다.

#### 6. 젊음으로 물든 동진시장

젊은 활기와 매력이 넘치는 연남동의 동진시장은 소소한 카페와 소박하지만 정겨운 식당, 그리고 젊은 아티스트들의 싱싱한 작품으로 활기와 매력이 넘치는 이색공간으로 이슈가 되고 있는 곳입니다. 7일장 형태로 매주 토요일에 문을 열고 있으며, 도심 속 제조업 활동이

새로운 가치를 만들고 지속될 수 있는 환경을 만들기 위한 거점 공간조성을 통해 생산자와 소비자의 연대와 협력, 순환 모델을 모색하고 있는 사람들이 모여 있습니다. 이곳 동진시장에서는 매년 두 번 열리는 축제가 있는데요, ‘약광조건예술제’라는 축제입니다. 그들 속에 살아가기 위한 최소한의 빛이라는 이름의 축제는 예술가들이 함께 공간과 호흡하고, 작품이 확산되기를 바라며 2 주마다 함께 만나며 준비합니다. 이런 동진시장 공간의 변화와 젊음의 유입을 통해 그 주변 골목들도 함께 변화하기 시작했습니다. 오래됐지만 분위기 있는 동진시장 뒷골목에서 동진시장을 중심으로 아기자기한 가게들이 하나둘씩 생겨나기 시작했고, 특이한 실내장식과 조용한 분위기는 사람들에게 입소문을 타기 시작했습니다. 옛 골목의 정취가 그대로 남아있으면서 한쪽에 자리 잡은 커피숍, 책방, 화방들은 오래된 분식점, 철물점, 세탁소 등 20 년 이상 자리를 지키고 있는 가게들과 서로 공존하고 있었습니다. 동진시장을 주축으로 젊음은 또 젊음을 부르고 있습니다.

## 7. 핫플레이스와 함께하는 젠트리피케이션

하지만 여기서 주목할 점은, 이런 핫플레이스들에서 어쩔 수 없이 생겨나게 되는 안타까운 현상이 있습니다. 바로 젠트리피케이션인데요. 지역의 변화로 인해 많은 사람들에게 주목받게 되고, 그에 따라 경제적인 변화도 자연스럽게 생기게 됩니다. 임대료가 상승하여 기존에 있던 사람들이 쫓겨나게 되고, 다른 곳을 또 찾아 헤매게 되는 현상입니다. 지역에 젊음이 되살아나고, 젊음의 기운이 넘치게 되는 것은 매우 좋은 현상이지만, 이렇게 어쩔 수 없이 생겨나는 젠트리피케이션 현상은 참 안타깝습니다. 그래서 연남동에서는 ‘동네를 살리는 공간 공유 프로젝트\_어쩌다 가게’라는 공간이 생겨났습니다. 다양한 채주와 개성을 가진 사람들이 한데 모여 공동 상업공간을 조성하고, 5 년간의 월세를 동결하여 장기임대를 보장할 수 있게 하고, 함께 콘텐츠를 기획하고 플랫폼을 제공하고 있습니다. 이에 그치지 않고 예술가들과 공동체가 지역주민들과 함께 벼룩시장이나 예술교실 같은 활동들을 하며 지역의 재생에도 영향을 미치고 있습니다. 이렇듯 작은 아이디어와 변화들이 지역의 가치를 높여주는 것 또한 확인 할 수 있었습니다.

## 8. 그림에도 불구하고 젊음은?

흔히 생각하는 젊음은 우리가 생각하는 것보다 더 큰 의미와 힘을 가지고 있습니다. 작은 젊음이 또 다른 젊음을 불러오고, 그에 따라 지역이 변화하고, 주변 사람들도 바뀌게 되는 것을 직접 보고 느낄 수 있었습니다. 앞으로도 많은 ‘젊음’들이 색다르게, 새롭게, 개성있게 지역과 사람과 소통하는 도시가 되길 바랍니다.

‘생각하는 물음표와 행동하는 느낌표가 하나가 되었을 때 젊음은 다시 태어난다.’

‘젊음을 사랑하는 자가 젊음을 가장 오래 간직한다. 젊음은 하나의 예술이다.’

## 世紀転換期のボナールの作品における街路と通行者の変容

吉村真（早稲田大学・博士課程）

---

### はじめに

フランスの画家ピエール・ボナールは、1895 年頃から 1912 年頃、つまり世紀末からベル・エポックと呼ばれる時期にかけて、パリの風景や人々をモチーフとする作品を多数制作している。ボナールは一般に 1890 年頃の画業最初期と 1913 年以降の画業後期の作品によって高い評価を受けている。すなわち 1890 年頃の作品はナビ派の装飾絵画様式を端的に示すものと見なされ、1913 年以降の造形は 20 世紀後半のオール・オーヴァーな抽象画を先駆すると評されるのである。しかし画家とパリのかかわりに着目するなら、初期と後期のあいだが重要になる。1895 年から 1912 年頃にかけてはボナールが首都の情景に熱中した唯一の時期であり、彼の画業におけるパリ時代と呼べる。本発表ではボナールがこの時期に制作したクリシー広場を舞台にする連作について考察する。そして本連作に窺える印象派の画家ギュスターヴ・カイユボットの作品《パリの通り、雨》の影響と超克を分析し、ボナールが通行者の視線で街路と群衆を捉え、多方向に通り返る空間・時間の経験を画面構造に取り入れたこと、及びそれによりナビ派の装飾的様式を脱却し、近代都市表象を刷新したことを明らかにする。

### 1. パリ時代のボナールと印象派

一般にパリ時代はボナールにとってナビ派的な様式と制作原理からの脱却の時期であったと語られる。1888 年に結成されたナビ派は、輪郭線でフラットな色面を囲んでフォルムを決定するゴーギャンのクロワゾニズムに衝撃を受け、絵画固有の秩序と装飾性の探求を開始した。しかし 1896 年 1 月にデュラン＝リュエル画廊で開かれた初個展前後の代表作からは、ボナールが街路を行き交う人びとの一瞬の姿を色斑のようにぼやけたシルエットとして粗い筆触で描き表していることがわかる。この変化の要因としてしばしば指摘されるのが印象派、とりわけ筆触分割の技法をもちいて外光のもと風景を描いたモネやピサロからの影響である。しかしながら両者の影響は筆触については当てはまっても、モチーフとしてのパリに対する関心が急に増大した点については説明できない。ここで発表者が取り上げるボナールの先駆者はカイユボットである。

### 2. ボナールのカイユボット受容

カイユボットは印象派の運動に参加したなかでも都市の現代性に特に深い関心をよせ、パリの往来の中に身を置いて通行者を間近で捉えた絵画を何点も残した画家である。発表者にはカイユボット特有のモチーフと視点こそがボナールに大きな変化を及ぼしたように思われる。ここで



改めて注目したいのがクリシー広場を描いたボナールの作品群におけるカイユボットの《パリの通り、雨》の受容過程である。1894 年 6 月にはデュラン＝リュエル画廊でカイユボットの回顧展が開催されるが、そこには《パリの通り、雨》も出品されていた。そしてボナールの 95 年頃の作品《クリシー広場とサクレ・クール寺院》には、これとそっくりのモチーフと構図が用いられている。したがってボナールがこのカイユボット展を訪れて、パリの街路の捉え方の何がしかを学んだと仮定したうえで、《パリの通り、雨》とクリシー広場を舞台とする一連の絵画を比較する。

1877 年のカイユボット作品《パリの通り》の特徴は、大胆なフレーミングと線遠近法の誇張・歪曲によって演出された空間の臨場感である。大胆なフレーミングとは画面右手前の通行者たちの足元を画面下端でトリミングしていることである。これによって画家は私たちにパリの通りを歩き、こちらへ向かってくる通行者とすれ違おうとしているような感覚を与えるのである。他方、線遠近法の誇張・歪曲は通りを歩き進むにしたがって私たちの足元で継起的に空間が開け、遠くに見えていた建物がだんだんと近づいてくるように感じさせる。カイユボットがこの絵で生んでいる空間の臨場感とは、時間的な通行の感覚と言い換えられる。クリシー広場を描いたボナールの絵画群を見ると、彼が時間的な通行の感覚・歩行者空間の臨場感を演出する仕方をカイユボットから徐々に学んでいったことが窺える。まず 95 年の《クリシー広場とサクレ・クール寺院》ではカイユボット風のフレーミングが主に構成のレベルで採用されるとともに画面前景と鑑賞空間の接続が試みられている。そして 1900 年と 1906 年頃に制作された 2 点において、画家は再び前進する通行者の足を下枠でトリミングする構図を用いつつ、カイユボット的な歩行空間の臨場感の演出にいつそう力を入れているように思える。

### 3. 通行者の視線と〈現代〉の多方向性

しかし上述の 1906 年の作品、あるいは同年頃の《クリシー広場の緑の路面電車》には、ボナール独自の特徴が見受けられる。それはひとつには 20 世紀初頭の新しい風物、ファッションや乗り物に対する関心であり、もうひとつには都市における通行の多方向への拡散と言える。1906 年の《クリシー広場》前景の女性たちは色とりどりのベル・エポックのファッションで身を包んでおり、またこの作品に見られる自転車と《クリシー広場の緑の路面電車》にタイトルの通り描かれている路面電車は、いずれもベル・エポックにフランスに普及した乗り物であった。見逃せないのは、こうした着飾った女性たちや、路面電車、自転車などがクリシー広場という大通りの交差点をさまざまな方向に向かって通り過ぎていく点である。カイユボット作品では中景の人物たちの動きはかなり整理され、構図に古典的な均衡とモニュメンタリティーを付与している。それに対しボナール作品で多方向に通り過ぎてゆく人々や乗り物は、いつそう乱雑で無秩序になった 20 世紀初頭の都市の活気を伝えている。

ボナールがパリに注いだ視線とは街路のなかに身を置き、人々や風景、時代の産物をすれ違いざまに観察する通行者の視線であった。そしてこのような視線で捉えられたパリは、ボナールを絵画平面そのものから広がりのある空間へ、装飾という無時間的な線とフォルムの論理から身体の運動の不規則性へと解放放っていったのだ。1906 年頃の 2 点のクリシー広場を見ると、人や物の通行は多方向化のはてに視線を画面周縁へ拡散させ、色彩のアクセントをあらゆる部分に散り

ばめ、空間の秩序の理解を阻む。これらの作品は確かにカイユボットの作品と同様に都市空間の視覚的経験を表象しているが、視覚的な空間の秩序を混乱させる点では同時代に誕生したフォーヴィスムやキュビスムを想起させる。そこでは 20 世紀初頭のパリの雑踏のリアリティーが、その多方向性のために、ボナールの芸術が有する潜在的な可能性のアレゴリーになっているのである。

## 세기말 전환기의 보나르 작품에 보이는 거리와 통행자의 변용

요시무라 신 (와세다대학교 · 박사과정)

---

### 인사말

프랑스의 화가 피에르 보나르는, 1895 년경부터 1912 년경의, 즉 세기말부터 벨 에포크라 불려지는 시기에 걸쳐, 파리의 풍경과 사람들을 모티프로 한 작품들을 많이 제작하였다. 보나르는 일반적으로, 1890 년 무렵의 초창기 화업과 1913 년 이후의 후기 화업에 제작된 작품이 높은 평가를 받는다. 즉, 1890 년 경의 작품은 나비파의 장식적 회화양식을 단적으로 나타내는 것이며, 1913 년 이후의 조형은 20 세기 후반의 울오버 추상화를 선구하고 있다고 할 수 있다. 그러나 보나르와 파리의 관계에 주목하면, 초창기와 후기 사이의 시기가 중요하다는 것을 알 수 있다. 1895 년부터 1912 년경은, 보나르가 수도의 정경에 열중한 유일한 시기이며, 그의 화업에 있어서 파리의 시대라 불리는 시기이다. 이번 발표에서는 그 대답을 찾아, 보나르가 1895 년부터 1912 년경에 제작한 클리시 광장을 무대로 그린 연작에 대해 고찰하고자 한다. 그리고 이 연작에 영향을 끼쳤다고 생각되는 인상파 화가 구스타브 카유보트의 작품 <비오는 파리 거리> 의 영향과 곤란 극복을 분석하고, 보나르가 통행자(passant)의 시선으로 관찰하고 거리와 군중을 다방향으로 공간과 시간의 경험을 화면구조에 도입한 점, 또한 이에 의해 나비파의 장식적 양식으로부터 벗어나, 19 세기 이후 근대 도시의 표상을 보이게 되는 점을 밝히고자 한다.

### 1 파리시대의 보나르와 인상파

일반적으로 파리의 시대는 보나르에게 있어서, 나비파의 양식과 제작원리로부터 벗어나는 시기라 언급되고 있다. 1888 년에 결성된 나비파는, 윤곽선으로 평면의 색면을 감싸서 형태를 결정하는 클루아조니즘(구획주의)의 영향으로, 회화고유의 질서와 장식성에 대한 탐구를 개시하였다. 그러나 1896 년 1 월에 뒤랑뤼엘의 화랑에서 열린 첫 개인전 이후의 대표작에서는, 보나르가 거리를 왕래하는 사람들의 한 순간을 색점처럼 희미한 실루엣으로, 거친 붓터치를 통해 그려내고 있다는 것을 확인할 수 있다. 이 변화의 요인으로 자주 지적당하는 것이 인상파, 특히 붓터치의 분할 기법을 사용하여 외광 속에서 풍경을 그린 모네와 피사로로부터의 영향이다. 그러나 두 화가의 영향은 붓터치의 사용법에 있어서는 설명할 수 있으나, 급격히 증가한 파리에 대한 화가의 관심을 설명하기는 어렵다. 이 부분에 있어서 발표자가 생각하는, 보나르에게 영향을 미친 선구자는 구스타브 카유보트이다.

## 2 보나르의 카유보트 수용

카유보트는 인상파의 운동에 참가한 사람들 중에서도 도시의 현대성에 특별한 관심을 보이며, 파리의 왕래 속에 자신을 놓고 통행자를 가까이서 그려낸 작품들을 여럿 제작한 화가였다. 발표자는 카유보트 특유의 모티프와 시점이야말로, 다른 인상파 화가의 영향보다 더욱 보나르에게 영향을 끼쳤다고 생각한다. 여기서 다시 주목하고자 하는 점은, 앞서 말했던 클리시 광장을 그린 보나르의 작품에서 나타나는 카유보트의 <비오는 파리 거리>의 수용과정이다. 1894년 6월, 뒤랑 뤼엘의 화랑에서 카유보트의 회고전이 개최되나, 그 때 <비오는 파리 거리>도 출품되었다. 그리고 보나르의 95년경의 작품 ‘클리시 광장과 사크레죄르 대성당’에서는, 이와 똑같은 모티프와 구도를 보이고 있다. 따라서 보나르가 이 카유보트전을 방문했을 때, 파리의 거리를 그리는 방법에 있어서 무엇인가를 배웠다는 가정하에, <비오는 파리 거리>와 클리시 광장을 무대로 하는 일련의 회화를 비교하고자 한다. 1877년의 카유보트 작품 ‘파리의 거리’의 특징은, 뭐라 해도 대담한 프레이밍, 구성과 선원근법의 과장, 왜곡에 의해 연출된 공간의 현장감이다. 대담한 프레이밍이란, 화면 우측 전면의 통행자들의 발밑을 화면 하단에서 트리밍, 절단하고 있는 점이다. 이로 인해 화가는 보는 이로 하여금 마치 파리의 거리로 걸어 들어가, 이쪽으로 향하고 있는 남녀와 엇갈려 지나가는 듯한 감각을 갖게 한다. 반면, 선원근법의 과장과 왜곡은 거리를 걸어가면서, 동시에 감상자의 발밑에서 잇따라 공간이 펼쳐져, 멀리 보이던 건물이 점점 가까워지는 듯한 감각에 사로 잡힌다. 카유보트가 이 그림에서 만들고 있는 공간의 현장감이란, 시간적인 통행의 감각이라 말할 수 있다. 클리시 광장을 그린 보나르의 회화들을 보면, 그가 시간적인 통행의 감각, 보행자공간의 현장감을 연출하는 방법을 카유보트로부터 조금씩 배우고 있었다는 것을 알 수 있다. 우선 95년의 ‘클리시 광장과 사크레죄르 대성당’에서는 카유보트 스타일의 프레이밍이 주로 구성에 있어서 사용되며, 화면 전경과 감상 공간이 서로 맞대어 이어지고 있다. 그리고 1900년과 1906년경에 제작된 2점의 작품에 있어서, 화가는 또다시 걸어가고 있는 통행자의 다리 밑부분을 절단하는 구조를 통해, 카유보트처럼 보행공간의 현장감을 더욱 연출하려고 했다고 볼 수 있다.

## 3 통행자의 시선과 <현대>의 다방향성

그러나 앞서 말했던 1906년의 작품, 혹은 같은 해에 제작된 ‘클리시 광장의 녹색노면전차’에서는, 보나르만의 특징이 두 부분에서 나타난다. 하나는 20세기 초두의 새로운 풍경, 패션과 교통기관에 대한 관심이며, 또 하나는 도시에서의 통행의 다방향으로의 확산이라 할 수 있다.

1906년의 ‘클리시 광장’전경의 여성들은 색색의 벨 에포크 패션으로 몸을 두르고 있으며, 또한 이 작품에서 보이는 자전거와 ‘클리시 광장의 녹색 노면 전차’의 타이틀 그대로 그려진 노면 전차는, 모두 벨 에포크 때 프랑스에 보급된 교통수단이었다. 빼놓을 수 없는 건, 이러한 차림의 여성들과 노면 전차, 자전거 등이 클리시 광장이라는 대로의 교차점에서 다양한 방향으로 지나가고 있다는 점이다. 카유보트의 작품에서는 중경의 인물들이 전경의 인물들과 교차하도록 왼쪽에서 오른쪽으로 걷고 있으나, 이들의 움직임은 매우 정리되어

수평수직의 축을 만들고 있으며, 구조에 있어서 고전적인 균형과 마치 기념비처럼 멈춰 있는 듯한 느낌을 주고 있다. 이에 대해 보나르의 작품에서 다방향으로 지나가는 사람들과 교통수단은, 더욱 혼잡하고 무질서해 진 20 세기 초두의 도시의 활기를 전하고 있다.

보나르가 파리에 쏟은 시선이란, 거리 속에 자기자신을 두고, 그 장소를 지나가는 사람들과 풍경과 시대를 관찰하는 시선, 또 하나는 스스로 사람, 풍경 그리고 동시대의 산물과 엇갈려 지나가는 통행자의 시선이라 볼 수 있다. 그리고 이러한 시선으로 바라본 파리는, 보나르를 회화평면을 벗어나 더 넓은 공간으로, 장식이라는 무시간적인 선과 형태의 윤리로부터 신체의 운동의 불규칙성으로 변화시켰다고 할 수 있다.

1906 년경에 제작한 2 점의 클리시 광장을 보면, 사람과 사물의 통행은 다방향화로 인해 시선이 화면 주변으로 확산되고, 색채의 악센트가 여러 부분에 나타나게 하여, 공간의 질서를 이해하는 데 방해를 준다. 이들 작품은 확실히 카유보트와 다른 인상파 화가들의 작품처럼 도시공간의 시각적 체험을 표상하고 있으나, 시각적인 공간의 질서를 혼란시키는 점에 있어서는 동시대에 탄생한 포비즘과 큐비즘을 상기시키게 한다. 그것은 20 세기 초의 파리의 혼잡한 사회가, 그 다방향성을 위해, 보나르의 예술이 갖고 있는 잠재적인 가능성의 알레고리가 되고 있다고 본다.

## ***Ikseon, The Neighbor's Talk***

ジョンウンジュ (成均館大学・博士課程) / 전은주 (성균관대학교・박사과정)

---

- Project Manager: Jeon Eun Joo, Baek Seung Hwan

- Collaborator: Song Yong Hun, Kim Seung Yoon, Kim Hyun Jung,  
Lee Ki Hun, Lee Ji Min, Ahn Seong Min, Jang Han Gyul, Choi Jae Hun

-Translator: Jeon Eun Hye, Kim Da Rong

### ◦ **Five Keywords of Ikseon**

Ikseon is a small town in Jongro-gu, Seoul. On February 28, 2016, it was introduced to people through ‘Documentary 3 days’, a TV program about some places in South Korea. Can you imagine why people are interested in this small town? It's because Ikseon is a very unique and valuable town in Seoul. So I'd like to talk about five features about Ikseon.

Most of all, there are so many Korean traditional houses that have remained for 100 years. Recently, Ikseon has been changed in so many different ways. Some young people have remodeled the houses to use them for a modern style cafe, pub, or restaurants. Also, there are various stories of people who have lived in Ikseon for so long days. We, a lab of urban and architecture of Sungkyunkwan University, are participating in the process of making Ikseon District Planning and organizing governance for maintaining this beautiful town. Therefore, I'm going to record the stories and changes of Ikseon and live in this town as a resident. So I'd like to show you five features of Ikseon: Hanok, architecture, people, events, base camp.

#### **01 Hanok, a Korean traditional house**

About 140 Korean traditional houses are concentrated in Ikseon. When one of departments of Seoul City researched in 2008, it was revealed that Ikseon had the greatest number of Korean traditional houses. This is a complex of Hanok that was built by Jeong Sekwon, who was the first developer in Korea.

The Seoul government has redeveloped old towns to new ones by removing all over until a recent date. In the early 2000s, Ikseon was also in danger like some cities and it was designated as the Urban Environments Improvement District so it was planned to be pulled down over all. In the east side of Ikseon, there are Jongmyo, a UNESCO world heritage and three valuable heritages in Ikseon: a path which exists for more than 600 years, another path built in Chosun Dynasty, and 100-year-Hanoks. Because they are worth being saved,

redeveloping project should be reconsidered.

Ikseon Urban Environments Improvement District is planned to be released in December 2016. It means the town will be preserved and managed instead of being pulled down. The conservation of this town is going to be realized by Ikseon District Planning. The District Planning contains many contents like restriction and encouragement about form, volume, stories of buildings and types of business.

## **02 Architecture, combination of the old and the new**

So many Hanoks in Ikseon have been preserved so far. However, because they were not properly fixed, it's quite hard to stay in that circumstance. But the town began to change little by little in the 2010s. In 2009, Ddeul-an, a Korean traditional cafe, opened in a renovated Hanok having classes about City and Hanok. Louis Park, a photographer, who was in that class, opened 'Sik-Mul', a gallery and modern cafe, connecting and using four Hanoks. And another space designer team 'Ikseondada' was very impressed by the old town, so they also opened a cafe, two restaurants, a gallery & cafe, and a guesthouse in 2015. It's very valuable to remodel traditional style houses into a modern style space. Young people didn't think that the Hanok was old and humble, and they had a deep interest in changing it to a new space, combining old and new architectural styles.

## **03 People**

These days, many people who are foreign tourists like Chinese, Japanese and Koreans are coming to Ikseon for various attraction and food. It's because Ikseon is in Jongro-gu which is the center of Seoul and near the Ikseon there are four Korean palaces and very famous places. The Ikseon is the place for not only the tourists but also the residents who have lived there for many years. They know many stories about the town and have their own stories in the town. History of the town is written by them as well as by newcomers.

## **04 Events**

Nowadays, In Ikseon many events are happening. The residents wanted to protect their Hanok in Ikseon, so they organized one group which was a Forum for preservation of Hanok. And flea market is being held every month in the alley. Also, a special theater company put the play, 'Would you like beer?' in a garden of Hanok.

## **05 Base Camp, The Neighbor's Talk**

While Ikseon District Planning is being made for three months, from March to June 2016, we are in the process and undertake a project by meeting the residents and listening to them about what they want and need. If the urban management planning is established with residents' opinions, the town could be maintained and managed properly according to the planning. It shows that a recent urban planning in Seoul is changed more democratically.

Whenever I meet the people and talk with them, I could understand their lives. And now I do love them and the place. For me, three months were very short to know all about them. So

I decided to live in Ikseon for a year to be a real resident and now I live in the town. I'm a typical apartment kid born in the 1980s in South Korea. From when I was a baby and until now, I have lived in an apartment of a typical Korean style. For this reason, it is such a meaningful event in my life. And I even named this place 'The Neighbor's Talk'. It means we listen to their stories for recording the history of the Ikseon. From now on, I'm going to experience the Ikseon's four seasons and record them. And then I will let many people know about this story.



***Berenice Abbott's "Changing New York":  
People and Lives of the Heterogeneous City***

山田隆行（早稲田大学・助手）/야마다 타카유키（와세다대학교・조수）

---

From 1929 through the 1930s, female American photographer Berenice Abbott (1898-1991) photographed New York City where 19th century buildings had been demolished, altered, or replaced with huge modern buildings. In this monumental project called “Changing New York,” she photographed historical, old, and abandoned buildings, as well as huge bridges and skyscrapers and their construction, often juxtaposing these oppositional objects. Simultaneously, she was also interested in capturing people in New York City. Although she considered these photographs of people essential in her New York portrait, they have received little attention and have remained in the shadow of her monumental pictures of New York architecture in “Changing New York.”

Abbott photographed flows of mass of people, who seem to be reduced to anonymity under magnificent skyscrapers in changing New York. Abbott photographed the conflict between dwarfed people and skyscrapers in such a disharmonious and heterogeneous city as New York. Here, she also attempted to capture the “tempo of the metropolis,” which was “not eternity, or even time, but of the vanishing instant.”

As a photographer who considers human subjects necessary in the portraits of New York City, Abbott took many snapshots of people in the street. She photographed various immigrants, peddlers, and frivolous objects, all of which were on the margin of the society and would disappear soon in a modern society. She observed that New York was full of contradictions—high and low lives, the rich and poor, old and new things coexisted—which she considered an essential aspect for her New York project.

Abbott also focused on different types of laborers, including construction workers and fishermen. Though both of them would be categorized just as laborers, they are different; the former type of labor is permanent and has continued even in the modern society, whereas the latter is temporary and when the construction ends, the labors are out of a job. Adding these two types of laborers to her portrait of the city, Abbott stresses the heterogeneous aspects of New York that would look homogenous when it is viewed from the top of the skyscrapers.

Abbott's photographs of people attest to the fact that people are essential aspects in her New York portrait, but they have remained in the shadows of Abbott's fame as a photographer of New York architecture. This is due to the publication of Abbott's photographic book *Changing New York* in 1939 by E. P. Dutton and Company. Against the initial idea of Abbott and her business partner Elizabeth McCausland, the publisher wanted a guide-book like book: a book of New York, so-called the city of "silent lifelessness" in which "all look ghost." Eventually, Abbott and McCausland agreed with the publisher, which ironically met the purpose of Abbott, McCausland and E. P. Dutton to broadly circulate their books among a mass audience.

Although Abbott has been well known as a celebrated photographer of New York architecture thanks to her *Changing New York*, she simultaneously directed her serious attention to various types of people, especially those on the margin, and their diverse ways of living in the 1930s. Abbott's photographs of New York vividly convey the dynamics and heterogeneity of the city.